ドイツ植民地に関する ポストコロニアルなプレ-ホロコースト小説

── ウーヴェ・ティムの『モレンガ』論 ──

副　島　美由紀

1．アフリカ・ディスコースの新時代

冷戦構造が崩壊して東西ドイツが統一された 1990 年以降，ドイツの社会に生じた数多くの変化の一つとしてアフリカに対する関心の高揚を挙げることができる。80 年代までのアフリカは，〝第三世界〟に関心を抱くドイツの知識人にとっても特別な興味の対象ではなかった。が，90 年代に入ると，特に旧独領植民地であったアフリカ諸国[1] に関する専門書や実用書[2]，歴史小説やエッセイ等が多く出版されるようになる[3]。またアフリカを舞台にした映画も競い合うように制作されるなど[4]，現在ドイツの知的営為の場では〝アフリカの流行（Arfika-Mode）〟[5] または〝アフリカ・ブーム（Arfika boomt）〟[6] と呼ばれるような状況が生じている。この新たな現象は，長く南アフリカの占領下にあった旧独領南西アフリカが 1990 年にナミビアとして独立したことや，翌年その南アフリカでアパルトヘイト体制が終焉を迎えたことなどの政治的変化に起因するところが大きい。以前の東西ドイツ政府と南部アフリカとの間に存在した緊張関係の要因が消滅，もしくは大きく変化したからである[7]。が，それに劣らず重要な要因として，90 年代に入ってドイツの知識人層がポストモダニズムやオリエンタリズム批判，ポストコロニアリズム等の思想を遅ればせながらも消化し，歴史学や文学の場に新たな〝アフリカ・ディスコース〟が生まれたこと[8] を挙げるべきだろう。これらの研究書や文学作品の多くはアフリカ史の文脈における修正主義[9] の視点に立っており，それは第二次世界大戦前の〝アフリカ・ディスコース〟とは異質のものである。D. ゲッチェの言葉を借りれば，「千年紀末以来，ドイツ語圏の文学におけるアフリカ・ディ

スコースは，量的にも質的にも新時代を迎えた」[10] 様相なのである。

この新たなポストコロニアル的〝アフリカ・ディスコース〟において中心的な地位を占めているのは，前述の若き国ナミビアである。そもそもドイツによる植民地支配は 1884 年から 1919 年までの 35 年間と比較的短かったものの，現在のナミビアである南西アフリカはドイツにとって唯一の入植植民地としてドイツの植民地政策の中でも重要な位置を占めていた。入植者を優遇した植民地政策は原住民をほぼ無産状態にし，その社会組織を破壊し，ナミビアの社会は今日でも特に土地所有の問題においてその構造的影響を被っている[11]。またこの国は 1904 年から 1907 年まで「ヘレロ・ナマの蜂起」と呼ばれる植民地戦争を経験した。それは原住民に対する絶滅戦争であったことから，今日では 20 世紀最初のジェノサイドとして国際的に認知されている。しかし第二次世界大戦後，南アフリカが第一次大戦後以来の委任統治を足掛かりにして違法な占領を行ったため，ナミビア人の組織[12] は 1989 年まで南アフリカを相手に「ナミビア独立戦争」と呼ばれる闘争を行わねばならなかった。そのためそれ以前の植民地戦争の負の遺産に取り組むという課題は，長い間ドイツとナミビアの間で持ち出されることがなかった。ところが 2001 年になってナミビア側からドイツの企業と政府に対してジェノサイドの被害賠償を求める訴訟がアメリカ合衆国において起こされたことから，ドイツは新世紀に入るなり一世紀前に起きた戦争に関わる新たな「過去の克服」を迫られることになった[13]。それにより「ヘレロ・ナマの蜂起」が主に英語圏におけるジェノサイド研究の対象として注目されるという効果がもたらされ，さらにそれがドイツのメディア[14] と学問に対して取り組むべき課題としての認知と研究の深化を促している[15] と言えるだろう。

ドイツの植民地に関するアフリカ史的修正主義の視点に立つ文学を語る場合，まず「ヘレロ・ナマの蜂起」を主題としたウーヴェ・ティムの『モレンガ』[16] を挙げるべきだろう。ティムの作品は日本では『カレーソーセージをめぐるレーナの物語』[17]，そして児童文学の『わたしのペットは鼻づらルーディ』[18] が翻訳されているのみで，作家としての彼が話題になることは決して

多いとは言えないが,ドイツでは68年代の作家の中で最も重要な存在の一人とされている。『モレンガ』は30年以上も前に書かれた作品ではあるが，アフリカ・ブームを迎えてアフリカに関する作品が多く存在する今日の視点から見ても，ドイツのポストコロニアル文学を代表する最も重要な作品の一つである。むしろ，ジェノサイドとしてのドイツの植民地戦争に関する研究が深まった今日こそ，『モレンガ』がドイツの文学史に占める布置とその価値はより正当に評価され得ると言えよう。また近年ティムは2つの自伝的作品を発表しており[19]，デビュー作[20]を含めた彼の自伝的作品群と『モレンガ』との関係性を考察してみるなら，それはティムの作家研究にとって新たな視点を加えるばかりでなく，ドイツの現代文学史を顧みるという重要な作業に繋がっていく筈である。従って本論の目的は，第二次大戦後のドイツにおけるアフリカ・ディスコースの変遷を確認し，その文脈が到達した2009年の視点によって『モレンガ』を再読することにある。さらにドイツにとってのもう一つの「過去の克服」の展望を，現在のジェノサイド研究との関連において論じてみたい。

2．忘れられた植民地・忘れられた戦争

現在の〝アフリカ・ディスコース〟の特徴を把握するにあたり，まずはドイツにおける80年代までの植民地に関する言説を振り返ってみる必要がある。ドイツの植民地支配の歴史は長い間忘却の淵に追いやられていた，とはよく言われることである[21]。G. クリューガーはそれを「ドイツの記憶地図の中の空白地帯」[22]と呼んでいる。しかし1919年に第一次世界大戦の結果として植民地を失って後，ドイツは植民地に対する野心と関心をすぐに失った訳ではなかった。まず，ヴェルサイユ条約によって旧独領植民地の大部分がイギリス，フランス，ベルギー等によって分割されたため，ドイツが抱いたのは自らが列強の植民地主義の犠牲者であるという意識であった[23]。また，ドイツはアフリカに文明をもたらすという善行を行ったという自負もあり[24]，〝ドイ

ツは植民地経営の能力に欠ける″という戦勝国の言い分を，「植民地責任に関する虚言（Kolonialschuldlüge）」として拒絶しようとする動きもあった[25]。1919 年のうちに社民党を始めとする主流政党の全てが植民地奪回要求を掲げ，多くの植民地協会はその宣伝活動を継続した[26]。しかしこのような超党派の植民地奪回運動も，既にヴェルサイユ条約を受諾した共和国政府を動かすことは出来なかった。植民地主義者たちは国家社会主義ドイツ労働者党に希望を託すことになる[27]。かくして植民地主義のイデオロギーは第三帝国期に入ってからナチスの人種主義により補強され，植民地奪回の声は生存圏拡大のプロパガンダに組み込まれて第二の高揚期を迎える[28]。アフリカの植民地奪回はヒトラーにとって優先課題ではなかったにしても，ナチスの世界政策の視野には旧独領植民地の奪回のみならず，ベルギー領コンゴやフランス領赤道アフリカを手に入れてアフリカ大陸を横断する中央アフリカ帝国を作ろうという野心的な計画があったと言う[29]。ドイツ人に海外植民地への移住を促すハンス・グリムの『土地なき民』[30] のような小説がベストセラーになり，その表題は当時の流行語として流布した。1926 年創立の「レンツブルク女子植民学校（Koloniale Frauenschule Rendsburg）」では 1930 年からナチスの親衛隊との協力により人種学のカリキュラムが追加され，優生学的見地から海外のドイツ人入植地への女性の移住が奨励された[31]。「オーム・クリューガー」，「われらのカメルーン」，「アフリカのドイツの国」といった旧植民地を主題としたドイツ映画の多くもヒトラー政権下で制作されており，植民地政策の競争者である英・仏への反感を煽って植民地奪回に対する支持を獲得しようという政府の意図を見て取ることができる[32]。つまり，植民地喪失の時点から第二次世界大戦の終結まで，植民地主義のイデオロギーはむしろヴェルサイユ条約への反感とナチスの生存権拡大政策によって実は強化されたと言うべきなのである[33]。

しかし第二次世界大戦の類のない破壊の後，ドイツは戦後の復興とホロコーストに関する多くの取り組みに労力を費やさねばならなかった。第一次大戦に関する記憶が抑圧されたのと同様に，植民地主義の記憶も抑圧され，

忘却されていった[34]。さらにヨーロッパの旧植民地で数々の独立戦争が起きた時，対処を余儀なくされる宗主国の苦渋を目の当たりにしたドイツでは，植民地を持たぬことの利便の方が意識されるようになる。自らも植民地主義の犠牲者であり，新生アフリカ諸国との間に軋轢を持たぬという立場を利用して，外交において優位に立とうという計算である[35]。そして国民の間にも，植民地支配に関する限りドイツは負の遺産を持たぬ（unbelastet）[36] 潔白な（mit reinen Händen dastehen）[37] 国であるという考えが徐々に広まるようになっていった。

従ってドイツの植民地支配の歴史はただ忘却されたと言うよりは，クリューガーが主張するように，その記憶が「繰り返し抑圧された」[38] と言った方が正しいだろう。いずれにせよ，ナミビア生まれの歴史家である J. ツェラーの言葉を借りれば，1904 年に起きた植民地戦争などというものは「完全に忘れ去られてしまった」[39]。1990 年以前のドイツ人の植民地に関わる意識を，米国の歴史家である L. ウィルデンソールは，「島国のように偏狭で」「頑固なまでにノン・ポストコロニアルなポストコロニアルのアイデンティティ」[40] と呼んでいる。

西ドイツの歴史学の分野においても，80 年代中盤に至るまでドイツの植民地支配が批判的考察の対象になることは稀であった[41]。むしろ研究は東ドイツにおいて，マルクス・レーニン主義による帝国主義批判の見地から行われていた。1981 年のティムの弁によると，南西アフリカに関する H. ドレクスラーと H. ブライの 2 冊の専門書[42] を除けば「ドイツの植民地の歴史を総括した研究書は一冊もない状態」[43] であった。ようやく事情が変化し始めたのは 80 年代半ばになってからである[44]。1985 年，ティムが望んだような〝総括の書〟としては最初のものである『ドイツ植民地の歴史』を著わしたホルスト・グリュンダーはその序文で，「植民地獲得から百年を経た今，ドイツ植民地の過去を現在の視点から批判的に概観してみるべき時が来た」[45] と述べている。しかし彼もその 10 年後に「アフリカ・ブーム」が到来するとは予想していなかったことだろう。

3．忘れられた植民地文学

以上に述べたような植民地支配に関する世論の関心の薄さは，文学界にも反映されている。ドイツ文学におけるポストモダンおよびポストコロニアル的事象に関する代表的研究家，P. M. リュッツェラーによると，ドイツでポストコロニアルな言説という文脈を持ち出すと，常に以下の二点を論拠とする拒否反応が見られると言う[46]。まず，ドイツは植民地支配の歴史には関与していないのでポストコロニアルな言説の必要性を持たない（keine post-kolonialen Bürden haben）という説である。実際にはリュッツェラーが反駁するように，ドイツ帝国は 1884 年からの 35 年間，イギリスとフランスに次いで世界第三位の植民地面積を持つ宗主国であった。また，南西アフリカにおける「ヘレロ・ナマの蜂起」は，アフリカ史の専門家の言葉を借りれば「ヨーロッパによるアフリカ支配の歴史において最も陰惨な出来事の一つ」[47] であったし，ドイツにとってもう一つの植民地戦争であるタンザニアでの「マジマジ反乱」も，ジェノサイドの範疇からは外れるにしても「ヘレロ・ナマの蜂起」より多くの死者を出し，多大な被害を地域にもたらした[48]。にも拘わらず「マジマジ反乱」は現在でも言及されることが少なく[49]，忘れられた戦争の感が否めない。

第二の拒否反応の論拠は，植民地というテーマはドイツ文学史において言及すべき役割を担わなかったし，現代文学においてもいわゆる〝第三世界〟は周辺的な要件である，というものである。これに対しては後述するような植民地文学のベスト・セラーを挙げて反論できるのではあるが，確かにジャンルとしての植民地文学は長い間ドイツでは文学研究の対象となることがなかった。J. ヴァルムボルトが 1979 年にこれをテーマとした博士論文に着手した時，先行研究が存在しなかったと言う[50]。この事実に関して彼は，ミッチャーリッヒが『喪われた悲哀』において提示した「自己の過去を疎外すること（Verfremdung der eigenen Vergangenheit）」[51] というドイツ人の精神構造に関するテーゼを想起せざるを得ない[52]，と語っている。H. ブライも自

国の学問状況に関しては，「歴史を自己批判的に見ることに対する「国民的拒否」の伝統は，学問の中にも浸透している」[53]，と手厳しい。ミッチャーリッヒによれば，「このような忘却可能であること，(...)ある集団的な不可触タブーを作り上げてしまうことの経済利益は，少なくない」のである[54]。植民地文学は職業作家によらない作品が多かったこともあり，〝芸術的に価値のない〟[55]〝質の悪い文学〟[56] として，長い間ドイツ文学研究の領域から退けられてきた。しかし J. ノイスや R. ベルマンが推測する通り，戦後の民主主義的コンセンサスを共有する者にとって，植民地主義を無批判に支持する自国の文学と直接対峙することは心理的に困難であったに違いない[57]。それはポストコロニアリズムのような批判理論を得て初めて可能になるような研究対象であった。従って，戦後ドイツの植民地文学の研究に着手した研究者たち，例えば H. リドリーや J. ノイス，S. ザントップやリュッツェラーらが英語圏の学者たちであることは決して偶然ではない[58]。

彼らの研究がまず共通して指摘するのは，植民地文学の作品数と発行部数の多さである。例えば真に植民地主義的な文学の代表として知られるグスタフ・フレンセンの『ペーター・モーアの南西アフリカ行き』[59] であるが，これは「ヘレロ・ナマの蜂起」の戦争譚として書かれ，大きな成功を収めた。フレンセンはドイツ文学史においてベスト・セラーと呼び得る最初の小説と言われる『イェルン・ウール』(1901 年)[60] の著者として既に名を知られており，1906 年に『ペーター・モーアの南西アフリカ行き』を書く頃にはドイツで最も高額の印税を手に入れる作家となっていた[61]。その知名度も手伝ってか，『ペーター・モーア…』は出版初年度のうちに 6 万 3 千部が売れ，その後 5 カ国語に翻訳されて国際的なベスト／ロング・セラーとなり[62]，最終的には 1952 年までに 44 万 4 千部が発行されたと言われている[63]。恐らくはこの国際的な成功により，フレンセンは 1914 年以前何度もノーベル文学賞の候補として挙げられるほどの名声を成した。他にも「ヘレロ・ナマの蜂起」以降，この植民地戦争をテーマとした様々なジャンルの文学，例えば戦争譚，従軍記，冒険物語，兵士の回想録，入植者の逸話といった作品[64] が「洪水のように」[65] 世

に出たと言われ，S. ベニングホフ-リュールの研究によると，1884 年から 1914 年までの間に出版された植民地小説は 500 以上に上ると言う[66]。

『ペーター・モーア…』以上に成功した植民地文学は，「ドイツ民族の最初の偉大な政治小説」と言われた[67] 前述の『土地なき民』である。著者のハンス・グリムはドイツ帝国時代にフレンセンの影響下で[68]『南アフリカ物語』[69] や『西アフリカ紀行』[70] 等を書いていたが，植民地喪失後に書かれた『土地なき民』は『ペーター・モーア…』を超えるベスト・セラーとなり，その総発行部数は 1965 年までに 78 万部に達している[71]。また，青少年向けの植民地文学も数多く書かれた。中でもヘニー・コッホの『南西アフリカの一体車輪』[72] や独領東アフリカおける植民地防衛隊の指揮官であったレットウ-フォーベックによる『ハイア・ザファーリ』[73] などが挙げられるが，『南西アフリカの一体車輪』は 1910 年から 28 年の間に 17 版を重ね，『ハイア・ザファーリ』は 1920 年からの四半世紀の間，青少年文学のベスト・セラーであった[74]。このような青少年向けの植民地文学に対しては，複数の教育学者や文学研究者から，「青少年の意識を実直で健全な現実の人生経路から逸らし，結局は社会的な秩序と価値観を危うくするものだ」という批判の声があったと言う[75]。彼らの危惧は，実際に多くの青少年がこれらの文学に引き付けられたことを証すものでもあるだろう。

しかし植民地文学について言及すべきは，夥しい数の作品数[76] と発行部数ばかりでなく，H. リドリーが説くようにそれが当時の植民地とドイツ国内の社会状況を映し出す二重の鏡であったという点であろう[77]。植民地文学は一方では植民地政策のプロパガンダという性格を持ちながら[78]，他方ではドイツ本国の社会に関わるフラストレーションの表現を吸収する場でもあった。つまり階級制度に捉われた社会の閉塞感や，〝統一国家〟とは名ばかりで民族的アイデンティティを確立できない焦燥感，文化ペシミズムから来る自然回帰願望，あるいは社会的慣習の束縛等を打破する期待といったものを表現する手段としてである。例えば〝大衆文学としての植民地文学の創始者〟[79] と呼ばれるフリーダ・フォン・ビューローは，植民地運動に心酔し，1886 年に「全

ドイツ植民地医療活動婦人同盟（der Deutsch-nationale Frauenbund zur Krankenpflege in den Kolonien）」を設立して自らアフリカに赴いた女性であった。『東アフリカ日記』,『熱帯神経症』,『約束の地で』[80] といったその著書の多くが植民地における白人上流社会の華やかさを伝えていたため，彼女自身が〝植民地の恋人（Kolonialfreundin）〟[81] と呼ばれたが，ルー・アンドレアス・ザロメの親友であった本人は女性の権利拡大論者であった。女性の植民地進出を奨励する目的において書かれ，プロイセンの社会における官僚制や退廃，性差別に対する批判をも含んだそれらの作品は，自由と自立を求める女性読者の間にある種の希望と開放感をもたらしたに違いない[82]。また，グスタフ・ボレの『我らの植民地』[83] やアフリカの入植地を舞台とするユートピア小説であるテオドール・ヘルツカの『フリーランド』[84] は，階級制度のない自由で民主的な共同体を描いている。実際にヘルツカのフリーランド構想に触発された多くの人々が「国際フリーランド協会」を設立し，英領東アフリカで土地を入手して入植地の建設を試みたと言う[85]。またフレンセンの『ペーター・モーア…』は様々な領邦から集まったドイツ兵たちの一体感を伝えることによって，当時まだ脆弱であったドイツの「国民国家」のイデオロギーを強化する役割を果たしたと言われている[86]。つまり，〝劣等民族（Untermenschen）〟を殺害する権利を持つ〝文化民族（Kulturvolk）〟としての国民的イデオロギーである。

ドイツの植民地文学が入植地の社会に投影していた理想は〝民主主義〟であった，というのがリドリーの解釈であるが[87]，確かに『土地なき民』の中でその作中人物であるグリムは，アフリカの〝民主的〟な社会で十数年を過ごした後にドイツへ帰国した際，祖国に残存する階級の壁や縁故主義，国民の多くを襲う奴隷的不安に驚き，失望している[88]。作者のグリム自身はヒトラーが実際に植民地を奪回するとは考えていなかったし，ナチスの方策の多くに反対であったが[89]，彼がナチスと接近したのは民主主義の実現に期待したからであったと考えられる[90]。ある演説の中で彼は，自分がナチズムを「ドイツ民族の最初の，これまでのところ唯一の真正な民主主義運動」だと見なして

いると語っている[91]。池田浩士はグリムの文学について，ドイツの現実の歴史への肉薄ではなく，彼の強い《憧憬》がその文学を動かす原動力であり，読者への道を開くものだったと述べているが[92]，以上のことからも，『土地なき民』のような代表的な植民地文学は，植民地に有るものをというよりはドイツ本国に無いが故に彼らが探求する新しいもの，自立や自由や平等，あるいは人種的優越性に対する憧憬を映し出すものだったのであろう。

さらに興味深いのは，ドイツが植民地を有していた時代に植民地の様子やプロパガンダを伝えていたのは新聞や雑誌のメディアであり，植民地文学の受容が盛んになったのはむしろ植民地喪失後，つまり 1919 年から 1945 年の間であるという説である[93]。例えばカメルーンを舞台にしたハインリヒ・ノルデンの『魔術師の甥』[94] が世に出たのは 1913 年であったが，この作品が最も多く読まれたのは 1925 年のことであり，1 万 9 千部が増刷されてさらに 1955 年までに 10 版を重ねている。しかも，第一次大戦前に書かれた植民地文学の多くが 1930 年代後半，ナチスの政権下で再版されているのである。

植民地文学の鏡は現実を映し出すものなどではなかった。作者の多くがフレンセンのように植民地を見たこともなかったことを考えてみても，ヴィルヘルム時代の社会に対する不満，あるいはヴェルサイユ条約以降のルサンチマンと憧憬とが混淆を成した時に，植民地文学には彼らの憧憬が投影されて新しい色彩を帯びた現実のように読者の前に現れたのだろうと推測することができる[95]。『ペーター・モーアの南西アフリカ行き』，『約束の地で』，『土地なき民』等の成功した植民地文学は，このようにして多くの読書の心を捉えたのであろう。

植民地文学はドイツ帝国とワイマール共和国の社会状況を考える上で軽視できない文学ジャンルであり，80 年代以前の「甚だしい過小評価」[96] はやはり記憶の抑圧であると言わざるを得ないであろう。

4．ヴェトナム反戦運動からポストコロニアルへ

戦後のドイツ文学は，上述のポストコロニアルに対する拒否反応の言分通り，確かに暫くの間は〝第三世界〟に関心を示さなかったが[97]，西ドイツのNATOへの追随（NATO-Hörigkeit）や資本主義国の新・植民地支配を批判する60年代後半の作家たちの活動から，徐々に〝第一世界〟と〝第三世界〟との関わりに関する批判的関心が広がるようになった。特にH. M. エンツェンスベルガーは1965年から自分の雑誌「時刻表（Kursbuch）」において〝第三世界〟を特集し，若い読者たちに問題意識を喚起する先駆者的な役割を果たした。「時刻表」ではエンツェンスベルガーとペーター・ヴァイスが自らのキューバ，あるいはヴェトナム体験記を連載し，〝第三世界〟の闘争支援のあり方について議論を闘わせた[98]。それらは後に『ハヴァナの審問』[99]，『ヴェトナム・ディスクルス』[100]という作品として結実している。また68年運動の〝指導的頭脳〟であったルディ・ドュチュケらのグループも既に1964年にフランツ・ファノンやチェ・ゲバラを「21世紀の新しい人間」[101]と呼んで彼らの著書を紹介し[102]，学生たちの間でこれらが規範（カノン）として読まれるようになる。

しかし何よりも多数の学生にとって〝第三世界〟の問題に関する問題意識の覚醒をもたらしたのはヴェトナム戦争だった。ドイツにおけるヴェトナム反戦運動としては1968年2月にベルリン工科大学で行われた「国際ヴェトナム会議」が有名であるが，それ以前からベルリンの先鋭的な学生たちは〝第三世界〟との連帯を行動において示し始めていた。1964年のコンゴのチョンベ首相訪独反対デモや，翌年の南アフリカ宣伝週間に反対するデモ[103]，そして1967年6月のベルリンにおけるイランのパーレヴィ国王訪独反対デモと，彼らの活動は次第に大規模で組織的になっていく。反パーレヴィ国王デモの際に死亡した学生，ベンノ・オーネゾルクを追悼するドイツ各地での集会には，全西ドイツの学生の四割が何らかの形で参加したと言われている[104]。彼らの怒りがさらにその後の68年運動に拍車をかける結果となった。ティムはこの68年運動を振り返り，その重要な功績の一つは〝第三世界〟に関する緊

急で大きな問題提起を行ったことであると述べている[105]。

西欧以外の世界に関わる文学作品も次第に増えていった。またフーバート・フィヒテやハンス・クリストフ・ブッフのように，〝第三世界〟を主な作家活動の主題とする作家たちも登場するようになる[106]。よってリュッツェラーが主張する通り，ドイツの現代文学にとって〝第三世界〟は，〝周辺的な要件〟ではなく，むしろ大切なテーマの一つなのである[107]。

しかしそれらの作品は主に南米やカリブ海，インド等を題材にしており[108]，インゲボルク・バッハマンの『フランツァの症例』[109] やクラウス・シュテファンの『優雅な愛国者』[110] のようにアフリカが作品の背景として登場したとしても，それは〝第三世界〟のパラダイム内で批判的に扱われるというより，むしろ個人的体験を通して複雑で関与の困難な場所として知覚されるものであり[111]，ドイツの植民地支配の過去に批判的な視点を向ける作家は皆無であった[112]。アルフレート・アンデルシュは，「ティムの小説がなければ，一部の専門家を除いて植民地戦争のことなど聞きもしなかっただろう」と言ったという[113]。

ドゥチュケと同じく 1940 年に生まれたウーヴェ・ティムも，68 年世代としてファノンやゲバラを読み，エルサルバドルやナミビア，南アフリカ等に関して仲間たちと議論を重ねていた一人であった。例えば R. W. ファスビンダーが緊急事態法に反対して街頭演劇をやっていたのと同じ頃，ティムは工場労働者の前で政治詩を読むというゲリラ的イヴェントを行っていた[114]。ミュンヒェンとハンブルクで学生運動に参加していた当時のティムの体験は，自伝的なデビュー作である『暑い夏』に反映されている。主人公のウルリッヒはハンブルクで運動に参加する間，ビラ巻きや街頭での寸劇活動等によってヴェトナム空爆や〝第三世界〟の搾取に抗議する活動を行っていたが，ある日，「〝第一世界〟での闘争が〝第三世界〟での解放に繋がる」と説く仲間の誘いを受け，ハンブルク大学構内に建つヴィスマン記念碑の壊倒という抗議行動に加わる[115]。ヴィスマン記念碑とは，アフリカ探検家および独領東アフリカ総督として知られたヘルマン・フォン・ヴィスマンの銅像で，ハン

ブルク大学の前身が植民地研究所であったことから，植民地喪失後，最初の建立地であったタンザニアからハンブルク大学の前庭に移設されたものである。実際に 1968 年，反帝国主義運動の一環としてハンブルク大学の学生たちがヴィスマンの銅像を台座から引きずり降ろすという行動を起こし，それ以降銅像は市の博物館の地下に眠ることになるのだが[116]，ティム自信もこの行動に参加していた。そしてこの抗議行動がティムにとって自分と植民地支配との繋がりを意識するきっかけとなるのである[117]。

ティムの生まれたハンブルクは，ドイツ・アフリカ航路の起点として商業的にも軍事的にも植民地支配と深い繋がりを持った都市であり，多くのアフリカ出征兵を出した。ティムは幼少の頃，父親の友人たちから南西アフリカにおける武勇談を常に聞かされていた[118]。〝プロイセン式〟に厳しく躾けられた子供のティムには，仕事嫌いで時間に頓着せず，子供を体罰なしで育てるというアフリカ人の住む世界が，理想的な環境に思えたという[119]。父親の書架にある植民地関連書の背表紙を眺めて過ごしていたある日，彼は父親がわざわざ古本屋から調達したという戦前の植民地文学を贈ってもらう[120]。『暑い夏』におけるウルリッヒの回想によると，それはレットウ-フォーベックの『ハイア・ザファーリ』であった。それを貪るように読んだ彼はその後しばらく友達と〝ハイア・ザファーリ遊び〟をして過ごしたと言う[121]。ヴィスマン記念碑倒壊行動への参加と『暑い夏』の執筆によって，子供の頃から話に聞いていた南西アフリカに対する彼の関心が再び喚起される。そして様々な文献によって南西アフリカに関する研究を重ねた後，1976 年に当時は南ア領であったナミビアに赴き，植民地戦争を経験した元ドイツ人兵士に会うなどの現地調査を行い，1978 年に『モレンガ』を発表する。その年，E. サイードの『オリエンタリズム』が世に出ている。〝ポストコロニアル〟は言うまでもなく，当時はまだ〝ポストモダン〟という概念さえ広まっていなかった。ティムは『モレンガ』によって〝avant la lettre（概念誕生以前）〟[122] に，〝第三世界〟に関するディスコースから，20 年ほど後にポストコロニアルと呼ばれるディスコースへの転換点を画した[123] のである。『モレンガ』の誕生はドゥル

ツァクに言わせれば〝全く驚くべき現象（ein ganz erstaunliches Phänomen）〟[124] であり，当時の彼にはティムの過去の植民地戦争との取り組みがむしろ〝ドイツの秋〟と呼ばれた当時の重苦しい社会的現実からの逃避であるようにさえ思えたと言う[125]。では『モレンガ』のどのような点が〝革新的〟[126] だったのか。以下の章では作品の重要な特徴のいくつかを検討してみたい。

5．『モレンガ』：作品の背景と語りの構成

この作品の題材は 1904 年に南西アフリカで起きた「ヘレロ・ナマの蜂起」と呼ばれる植民地戦争である[127]。ヘレロ，ナマともにナミビアにおける代表的民族集団の名前であり，この二つの集団はそれぞれ独自にドイツ軍を相手に蜂起を起こしている[128]。ヘレロに対するドイツ軍の戦いは絶滅戦争であり，結果としてヘレロの人口の約 8 割にあたる 6.5 万人が死亡した。また戦闘の他にも強制収容所の設置等によって，ナマの人口も半数にあたる 1 万以上が失われた[129]。『モレンガ』[130] は主にナマの蜂起を扱っており，作品の題名である〝モレンガ〟とはドイツ軍に対して約 4 年のゲリラ戦を戦って戦死したナマの指導者，ヤコブ・モレンガ（Jakob Morenga）のことである[131]。モレンガは当時のドイツ軍の間では敵ながら畏怖と尊敬の対象であった。ヘレロを父に，ナマを母に持つ彼は両者の言葉を話すのみならず，キリスト教伝道団の教育を受けてオランダ語，英語，ドイツ語を習得し，渡欧経験もある新世代の指導者と目されていた。また負傷したドイツ兵を介護するという度量でも知られ，その名声は隣国のケープ州にも聞こえていたと言う[132]。しかし戦争終結の後，南アフリカに支配されたナミビアの歴史記述においてモレンガの名は全く忘れられるか，言及されるとしても〝牛泥棒〟か〝盗賊〟として意図的に蔑視されていた[133]。よってモレンガを作品の題名として選び，「クラウゼヴィッツも読んだ（M.244）」「黒いナポレオン（M.404）」と呼ばれる名将として彼の像を呼び覚ますことは，G. パーケンドルフが言うように勝

者によるアフリカ史の修正を迫る一つの挑戦であったと言えよう[134]。

しかし作品中モレンガは神出鬼没のゲリラ戦士として後景に見え隠れするのみで，実際にはこの作品は中尉として植民地戦争に参加したドイツ人の獣医，ヨハニス・ゴットシャルクの物語である。ゴットシャルクは除隊後にアフリカに残って農場経営を行うという目的を持って植民地防衛軍に志願し，南西アフリカへやって来た。が，到着して間もなくこの戦争の意味に疑問を抱くようになる。原住民と接してナマの言語を学び，プロイセン的な価値観とは全く異なる彼らの生活規範について知り，同僚や上官とこの戦争の意義について議論していくうちに，彼はこの植民地戦争が全くの不正義であることを確信するに至る。一度は脱走してナマ側に寝返ることも考えるが，それを断念し，早期除隊を願い出てドイツへ帰国する。以上が物語の粗筋であるが，この作品には従来の歴史物語にはない幾つかの特徴がある。

第一の特徴は，作品中に多くの視点が存在する点である。まず登場するのは偏在的な無名の語り手であるが，それはいわゆる〝全知の語り手〟などではない。ナマの使用人たちがドイツ人経営の農場からある日突然姿を消し，ドイツ人たちが不安に駆られる冒頭の場面が象徴的に示すように，この語り手は異変の理由や蜂起の原因を説明したりせず，語り手の叙述以外の部分を緩やかに繋いで物語としての統一性を辛うじて保つのみである。次にはゴットシャルクの日記の挿入による彼の視点がある。そして特異なのは，他の様々な文書からの引用が作品のかなりの部分を成している点である。例えば首相府の記録に残された書簡や電報，植民地省の記録，ドイツ軍参謀本部の公刊戦史，当時の新聞記事等であるが，H. ブライの研究書[135] からの引用もあり，これらがコラージュ作品のようにさながら一つの大きな戦争絵巻を描き出している。このような歴史的文書の引用は，一方ではネオ・リアリズム，あるいは記録文学（Dokumentarliteratur）といった手法を模索していた 70 年代のドイツ文学の状況を反映していると見ることができるが，他方では事実と虚構の混淆によるアメリカのファクション（faction）文学の手法を援用したものだとも言える。当時あり得たであろう様相を語り，出来事の背景にある

人物達の心理的な情動に着目しようとするその手法の意図をティムも明らかに共有してはいるが[136]，『モレンガ』の場合そのコラージュが可能にするのは，60 年代のファクション文学のように事実への近接性と文学性の両面が保持されるという美点のみではない。多種のテクストが併存し，視点が常に転換する〝ポリフォニー小説〟[137] において起こるのは，それぞれのテクストの信憑性の相殺である。個々の視点は相対化され，歴史資料と虚構テクストとの境界は曖昧になり，読者には歴史記述そのものが客観的なものなどではなく，個別の関心を背景として語られた〝物語〟として現れて来る。このような歴史の虚構性の暴露は，ポストモダンを経た現代の視点からはよく理解できるが，ウォルター・スコットを規範とするような統一的語りを持った伝統的な歴史小説とは全く異質のものである。今日の批評家の多くは『モレンガ』を〝語りの脱構築〟[138] として理解しているが，70 年代後半の状況下ではやはりそれは〝革新〟であった。

6．逆説的教養小説

第二の『モレンガ』の特徴として挙げるべきは，その教養小説的側面である。つまりこの作品を，主人公のゴットシャルクが戦争体験および異文化との接触を通して人間として成長・発展してゆく学習過程の物語として読むことができることである。ゴットシャルクの父は植民地産品を扱う食品雑貨店（Kononialwarengeschäft）を営んでおり，彼は幼少の頃から熱帯の未知の国に対する漠然とした憧れを抱いていた。除隊後の防衛軍兵士に提供されるという低い金利で南西アフリカに土地を買い，獣医学の知識を生かして農場を経営するというのが彼の夢であった。彼が抱いていたのは，アフリカの大地を〝文化民族〟であるドイツ人が開拓し，そこで人がゲーテを読み，モーツァルトを聴くようになるという（M.24），入植者の誰もが共有していたであろうような素朴ながらも尊大な入植のイメージであった。しかしアフリカに到着して間もなく，彼はこの戦争の意義や，自分が順応してきたプロイセン的価

値観，進歩主義的文明観等に疑問を抱き，最終的にはそれを否定し，従来の計画とは別の道を模索してゆくのである。

主人公のゴットシャルクは既に 34 歳であるが,他人の影響を受け易い性質であった。自分ではそれを人間的未熟さや性格的弱さの表れだと考えていたが，ある意味ではそれは他者に対する開放性と通じるものであった。彼はまず自分の部下である獣医候補生のヴェンストゥループの影響を受ける。ヴェンストゥループはこの植民地戦争が明らかな不正義であることを最初から見抜いており，防衛軍から脱走してアフリカの地で自分の道を切り開くという密かな目的を持っていた。彼は防衛軍に従軍するナマの人員から彼らの言語を学び，機会があればナマのゲリラ部隊に捕虜として捉えられることを目論んでおり，当初からゴットシャルクには「我々は間違った側にいる（M.54)」と示唆していた。ある日実際に脱走して姿を眩ますヴェンストゥループは，確固とした意思を持ちそれを貫徹するという点で，優柔不断なゴットシャルクのアルター・エゴとも言うべき存在である。まずゴットシャルクはヴェンストゥループに感化されるかたちでナマの言語学習を始め，次にカタリーナというナマの少女と交際するようになる。そしてナマの人々との距離が次第に縮まり，〝文化民族〟として彼らに獣医学を伝授しよう考え始める一方で，自分が無意味としか思われない戦闘の一員であることに激しく悩むようになる。この戦争の意義について同僚たちと議論するが，〝敵方が開始した戦闘に対する正当防衛である〟[139] とか，〝支配民族こそが土地を所有して生存すべきだ〟といった社会進化論的考え（M.256）に彼は納得することができない。さらに彼にとって大きな意味を持ったのは，ヴェンストゥループが脱走する直前に彼に贈与していったクロポトキンの『相互扶助論』[140] である。その中でも称賛されている〝ホッテントット人〟の種族的道徳としての相互分配，相互保護，温和な友愛等[141] を自ら目の当たりにし，彼はクロポトキン同様に，相互扶助こそが進化の鍵であり，人間社会の自然な様式ではないかと考えるようになる。ヨーロッパ人が進化の主要作因であるとする競争原理やダーヴィニズムの曲解である社会進化論を，もはや彼は肯定することができない。と

りわけプロイセン人にとっての徳である秩序，忠誠心，厳格さ，几帳面さといったことに彼は反感を覚えるようになる（M.379）。彼の夢の中では，以前は個人経営の農場であったものが次第にアフリカ人たちとの共同生活によるコミューンに変容してゆく。

ナマの社会に加えて彼が関心を持ったものは，アフリカの気候と植生である。例えば「トビマメ（jumpingbean tree）」と呼ばれる植物は，内部に小型の蛾の卵が産みつけられ，この蛾の幼虫の動きにより豆が跳ねて種を伝播する。また「半人間（Halbmensch）」と呼ばれる植物の一種[142]は，ナミビアの一部にしか生息せず，他の環境では殆ど育たない。「奇跡の潅木（Wunderbusch）」という名のトウダイグサ科の植物は，長い乾季を時には何年も耐え，雨を待ってようやく開花し，乾季が来ると再び長い眠りにつくような草木である。ゴットシャルクはナマの人々が植物と独特の心情的繋がりを持っていることに気づく。例えば「半人間」についてナマの少年は，「いつか彼らは解放され，その時この土地は正しい人々のものになる（M.67）」と説明する。また「トビマメ」について訪ねると，あるナマの老人は「それは我々の願いが育つ木だ（M.336）」と答える。最後にはゴットシャルク自身も「奇跡の潅木」について，「雨こそ我々の夢である（M.432）」と日記に記すようになる。このような繊細で微妙な生態系を見て，彼はヨーロッパ人が知ることのない世界秩序や生存形態の存在を知る。そこにあるのは〝闇の奥〟などではなく，独自の秩序ある世界である[143]。しかしそこではプロイセン式の生存技能は役に立たない。「原住民とこの土地自体から新しい思考を学べば，より深く，より正確に物事が見えてくるかも知れない（M.260）」のに，彼の目に映るドイツ人はここで「不要な重い旅行鞄を引きずっているかのように無駄な思考をしている（M.260）」か，あるいは「まるで盲目の足萎えのように行動している（M.418）」ように見える。彼はクロポトキンの言う〝動物の相互扶助〟のみならず，土壌や植物といったあらゆる自然の要素との共生の必要性を感じるようになっていく[144]。

戦争阻止のために何かをしなければならないと日々考えるようになるゴッ

トシャルクだが，戦闘状態にあっては参加するか離脱するかのどちらかしかない。脱走してナマの部隊に寝返ることを彼も考え始めるが，実際にナマ軍の捕虜になり，彼らの指導者であるモレンガと遭遇し，しかもその部隊に厚遇されて歌や踊りによる饗宴の一夜を共に過ごすうちに，自分がナマの文化に溶け込むことの不可能性を悟る。彼らの存在はやはり「近くて，同時に果てしなく遠い。そこに留まろうと思うなら，新しい考え方，感じ方を学ばねばならない。つまり根本的に考えを変えねばならない（M.420）」からだ。結局ドイツ軍に送還された彼は除隊を申し出，自分の言葉でも他者の言葉でもない第三の言語として，以前から関心を持っていた気象の独自の表記法を考案することで帰国までの時間を過ごす。そして補遺としての物語の最後の場面では，気象学者らしき人物として登場するのである。

このようにしてある意味では成長を遂げるとも言えるゴットシャルクの物語を，J. ヘルマントは「ドイツ文学の伝統に則った発展小説，あるいは遍歴小説」[145] と呼んでいる。このゴットシャルクの〝学習〟については，異文化との接触によって何らかの自己の変容を遂げた点を評価することも可能ではあるが[146]，〝学習〟は不完全であり，しかもゴットシャルクは何ら現実を変えることはできなかった。彼の〝学習〟は失敗であった[147] とも言え，リドリーはその失敗のゆえに『モレンガ』を逆方向（umgekehrt）の教養小説[148] であると言っている。しかしリドリーの意味する〝失敗〟は実はこの作品に対する賛辞でもある。なぜなら，作品の最後に残るのは「ある種の〝無〟，袋小路，（アフリカの）社会の退縮とゴットシャルクの沈黙」[149] ではあるが，彼が何かを〝学習〟し，この作品が読者に学習すべき視点を授けるとしたら，彼らはアフリカの独立にしか希望はないということを学ぶだろうからである。その意味では，U. ズィーモンがティムの作品に与えた総称とも言うべき「失敗の功績（die Leistung des Scheiterns）」[150] という名称は，的を得た表現である。また，このような作品が「ドイツ人によって書かれ得るということに驚きを感じる」[151] と R. クスラーも言うのであれば，『モレンガ』はドイツ文学の伝統に〝則った〟と言うよりは，それに抗った逆説的な教養小説と言うべきであ

ろう。

7．サバルタンの代理として語る牡牛

『モレンガ』には「郷土誌（Landeskunde1-3）」と名付けられた 3 つの章が存在する。そこで語られる挿話の殆どはゴットシャルクの物語とは独立しており，それらはかつて 19 世紀半ばから南西アフリカにやってきたヨーロッパ人たちの行動や奇行の数々を伝えるものである。そこに登場するのは例えば，生存の最後の手段としての盗みをなぜ神は容認しないのかという原住民の問いに答えることができず，神学的信念を失って帰国してしまう宣教師，アフリカに到着して間もなく正体不明の熱病で死んでしまうその後継者，原住民に最も所望された商品であり，ドイツの重要な輸出品であった火酒[152] を特製の巨大な樽に入れて行商に出たはよいが，首長と宣教師が禁酒令を布いている村に間違って辿り着き，その宣教師の妻と不倫関係を持った上に最後には発狂して失踪してしまう行商人，さらに，原住民の首長を大量の酒で前後不覚にさせたうえで土地売買の商談をまとめる山氏のような土地協会の代理人といった人物たちである。植民地協会からその活動宣伝のための写真集製作を委託されたが，梅毒を病む子供たちや虚ろな表情の母親，みすぼらしい黒人の使用人を従えて鞭を手にしたドイツ人など，悲哀や没落のイメージを伝えるその写真が協会の不興を買い，結局殆ど全ての写真をお蔵入りにしてしまう写真家もいる。あるいは若き測量技師のトレプトウは，原住民から買った土地を測量するために土地協会に雇われてやって来たが，本来の彼は測量ばかりではなく砂漠の灌漑や河川の改修といった壮大な治水事業計画を胸に秘め，野望に燃えた科学の狂信的信奉者であった。が，ドイツ人による詐欺的な土地買収[153] によって生命線とも言うべき水場を奪われた原住民に，せめて水場だけでも返してほしいと懇願される。善意の対処をすべく土地協会に出向いてみるが，協会の空虚なカフカ的迷路に迷い込むだけで何の解決もできず，次第に鬱状態に陥っていく。「郷土誌 1-3」は，南西アフリカという新

天地に集まるそれぞれに個性的なヨーロッパ人たちと，彼らを時には遠回しに観察し，時には寛容に受け入れるナマの人々の物語の集成なのである。

これらの物語は時にはグロテスクに，時にはユーモラスに描写されているが，何よりも特異なのは，これらが荷車を牽く牡牛の口から語られるという点である。熱病で死ぬことになる前述の宣教師は，ナマの少年ルーカスが牛の言葉を理解すると言うのを聞き，最初はそれを単なる迷信に過ぎぬと考えるが，ある日彼自身が荷車を曳いて自分の傍らを歩くレッド・アフリカン（der rote Afrikaner）と呼ばれる牡牛の言葉を理解していることに気づく（M. 138）。そして不可視の語り手自身も，「郷土誌」の章ではレッド・アフリカンが語るに任せるのである。レッド・アフリカンは牛としての自分の家系の年代記をも披露する。彼の先祖の牛たちはヘレロとナマの絶え間ない部族間抗争の略奪品として，両部族の間を行き来したり，その間にオランダ人がやって来てナマやブッシュマンを殺害するのを目にしたり，時には白人商人から買う商品（大抵は火酒か銃器であった）の代価として，白人の所有物になったりして来た。そして彼自身は現在ライン伝道協会（Rheinische Missionsgesellschaft）が所有する牛として宣教師のための荷車を曳いているのである。この牛が語るという一見奇妙な手法は，70 年代後半からドイツでも出版され始めたラテン・アメリカ文学における〝魔術的リアリズム〟の影響である。ティムはドイツ系アルゼンチン人の妻[154] を通して，その頃既にマルケス，カルペンティエル，フエンテス等の作品に接しており，それが自分にとって非常に重要な体験であったと語っている[155]。しかし当時はドイツ人作家が〝魔術的リアリズム〟の手法を使うことなどおよそ考えられないことだった。それはラテン・アメリカ文学においては可能であっても，〝ドイツ人はマルケスのように書くことはできない〟[156]，という訳である。実際にティムのよき友人でもあり，『モレンガ』の原稿審査に当たったハイナー・キップハルトは，「郷土誌」の三章を削除して作品を純粋な記録文学として発表すべきだと強硬に主張したが，ティムは自分の意思を貫徹した[157]。彼の〝魔術的リアリズム〟は前衛的な文学の擁護者たちには称賛されたが[158]，それは奇抜さを衒った作

風などではなく，彼にとってこの牡牛の語りは一元的なドイツ的語りと伝統的な歴史記述，特にコロニアルなディスコースに対するアンチテーゼであった[159]。

『モレンガ』においてはヘレロやナマの原住民たちが自ら語る場面が極端に少ない。無名の語り手でさえ彼らを代弁したりしない。ティムの弁によると，彼らの他者としての主体のうちに声を創造して語らせることは不誠実な行為だと思われた[160]。そのような異文化への「感情移入の美学自体がコロニアルな行為だから」[161] である。よって『モレンガ』の作品中，原住民たちが不可視化されたり声を奪われたりしていると言うより，むしろそれは G. スピヴァクが言うような，「自民族中心主義者的な主体がある一つの他者を選択的に定義することで自己を確立してしまうのを避ける」[162] ためのティムの試みなのである。物語のクライマックスとも言うべきゴットシャルクとモレンガの邂逅場面においてすら，モレンガがゴットシャルクと交わす言葉は直接話法によって語られたりせず，後日 4 種類の報告による間接話法として再現されるのみである。リドリーはこのことについて次のように言う。「アフリカは自己定義のためにヨーロッパ人を必要としない。譬えそれが善意のイデオロギーを持った者であっても。(...) モレンガはヨーロッパ文明に倦んだ文明批判が切望してやまない原始的なもの以上の存在なのである」[163]。自らもドイツ人である K. シュトレーゼに言わせれば，ティムのように「批判的な精神を持ったドイツの作家であれば，異文化の他者を真の意味で描き出すことはできない。(…) 他者との対話の場面はどこか融和のない真空性が残存する場所であり続ける」[164] からである。従ってティムはスピヴァクが非難するような，「自らは不在の非代表者を装いつつ被抑圧者たちに自分で語らせようとしている」「第一世界の知識人」[165] の役回りを極力避けようとする。まるで「語り得ぬことについては黙さねばならない」というヴィトゲンシュタインの命題を遵守するかのようである。しかし被抑圧者から声を奪うことはコロニアルな構造の再現に繋がらないかという C. ハーマンの問いに対し，ティムはそのような批判を正当であるとし，彼らに語らせる手法も可能であったろうこと

を後になってE. サイードから学んだが[166],『モレンガ』の基本的な主題の一つがナマの言語の抑圧，あるいは起こり得たかも知れない人為的な消滅（ausgerottet wird）であったため，言わばサバルタンの無言の主体性自体が作品中前景化する必要があったと語っている[167]。

そのかわり，無言の主体であるサバルタンの言わば代理として語るのが，牡牛のレッド・アフリカンである。牛の眼から見た問わず語り的な数々のエピソードと，作品に挿入される多様なパースペクティヴで記録された文書が「事柄を語り尽くさない開かれた語り」[168] を作り出す。そして読者の意識の中に意味の空隙が幾つも生まれ,読者は自分の想像力によってその空隙を埋め，南西アフリカの歴史において起きた様々な出来事を想起することになる。サイードが言うように，我々はテクストを「テクストに流れ込んでいるものと，作者がテクストから排除したものの両方に関連づけて読まなければならない。個々の文化的作品は，ある一瞬のヴィジョンであり，わたしたちがなすべきは，この一瞬のヴィジョンを，そのヴィジョンが喚起しうる様々な修正（リヴィジョン）＝再ヴィジョン（…）と対置することである」[169]。『モレンガ』の場合，サバルタンの代理が見た一瞬のヴィジョンを経由して読者の意識の中に再ヴィジョンとして残るのは，例えば宣教師の挫折を含めた伝道の試み，土地売買の詐欺的な手法，商品の代価としてドイツ人商人に収奪される原住民の家畜と土地，代わりにもたらされる飲酒の習癖，白人によるアフリカ人女性の強姦や子供でさえ犠牲となる性病感染，原住民の頭蓋骨を熱心に収集する骨相学者が後にナチスに仕える優生学者となる可能性について，等々であろう。

再びサイードの言葉を引くなら,「それぞれのテクストに，それ独自の気風というもの」[170] があり，後にギーゼルヘア・W・ホフマン[171] やディートマール・ベーツ[172] が行ったように原住民の視点からナミビア史を描くことも認められるべきであろうが[173]，ホミ・K. バーバの考えによれば,〈他者〉を解釈し，収納するような〝封じ込めの戦略〟を取らず，支配の関係を再生産しないということは，批評理論が持つ「組織的権力に対する最も重大な告発」[174] の作業

である。よって，ティムが『モレンガ』において行ったことは，幾人かの批評家たちが言うように，被抑圧者の尊厳を守り[175]，彼らの〝収納〟というヨーロッパ中心主義[176]をドイツ文学において初めて批判した作業[177]なのである。

8．プレ-ホロコーストとしての植民地戦争

これまで主にディスコースに関する点を中心にして『モレンガ』の特徴を紹介してきたが，この作品の最も大きな主題は実は人間性，あるいは精神性に関する問題である。端的に言えば，なぜこのような殺人が可能なのかという問いである。ゴットシャルクは日記の中で以下のように自問する。

> なぜこのような殺人が行われるのだ？なぜ人間は他人を射殺したり吊るし首にしたりできるのだ？そしてそれを縁日の見世物か何かのように見物できる者たちがいるのはなぜだ？何がこのような無関心を，とりわけこのような激しい憎しみを生み出すのだ？ひょっとしたら，そういった者たちの内部に，彼ら自身にとっても憎むべき要素があるのか，生き損ねた人生の一部のようなものが。何が一体，同情という感情を抹殺するのだ？（M.388）

ゴットシャルクはそもそも戦地に着任した当初から，食糧となる牛が十分いるにも拘わらず捕虜たちが餓死させられる理由が理解できない。原住民もその家畜も両方絶滅させる戦略であることを冷徹に見抜いているヴェンストゥループと違い，ゴットシャルクは眼前で起きていることに対して怒りを禁じえない(M.27 ff)。またある日，偵察隊に加わって遠征をした日，彼は同僚が戦闘員ではないナマの男性を簡単に射殺するのを見る。後で自分がそれを黙って見ていたことに気づき，そのことに驚愕し，急に無気力に襲われると同時に，自分もただの傍観者ではなく，何かに加担する，あるいは何かを

成す行為者であることを悟る（M.162）。しかし何を成すべきなのか？中途半端な決断はできない（M.255）。この問いが次第に彼を責め苛むようになる。

そもそも「ヘレロ・ナマの蜂起」は絶滅戦争（Vernichtungskrieg）であった。ドイツ軍の総司令官であったロタール・フォン・トロータ将軍が出したヘレロ絶滅命令は，『モレンガ』の中にも引用されている。

> 「ドイツ領内にいるヘレロは一人残らず，武器を持つ者であれ持たぬ者であれ，牛を持つ者であれ持たぬ者であれ，すべて撃つ。もはや女子供を保護したりはしない。女子供は同胞らのもとに追い返すか，さもなければ撃つ。これがヘレロ民族に対する余の言葉である。強大なドイツ皇帝の総司令官より。（M.32）」

後にこの命令は戦後の植民地支配を困難にするとして帝国首相のフォン・ビューローによって撤回されたため（M.32），ナマの蜂起に対しては適用されなかった。しかしナマに対しては戦闘員の殺害，非戦闘員の強制収容所への収容と強制労働，そして収容所で過労死，餓死，病死するに任せる等の方策が待っていたため（M.416），結果的にはナマの蜂起も絶滅戦争と同じことであった。ゴットシャルクの論敵であるエルシュナー少尉は言う。「ホッテントットは我々を大敵と見なし，殲滅しようとするから我々は彼らに先んじて彼らを殲滅しなければならない（M.375）」。しかしなぜ殲滅・絶滅（vernichten/ausrotten）という言葉がこれほど頻繁に使用されるのか。ローマ帝国の兵士がまず命名したという「Furor Teutonicus（ドイツ人特有の凶暴性）」，とヴェンストゥループは言うが（M.49），同部隊の大尉にとってさえ次第に理解が困難になる。「自分は祖国を防衛するために来たつもりだったが，実際は祖国を護ろうとしているのは彼らではないか。いったい何のためだ？彼らから家畜を奪い，女子供を射殺し，小屋を焼き払ったりしているのは？（M.273）」しかし誰も答えを持たない。遂にゴットシャルクが除隊を願い出て上司の少佐に理由を詰問された際，「罪もない人間の虐殺にこれ以上関与したく

ない（M.422）」と彼はそっけなく答える。少佐は返す言葉を失い，無言のまま背を向けて部屋を出てゆく。

しかもゴットシャルクにはもう一つの大きな疑問があった。個人はいかに集団に抗して行動し得るかという問いである。これについても彼は仲間たちと議論を交わさずにいられない。多くは個人ができることに対して否定的である。「きっとすべてが間違っている」と言う蹄鉄係のツァイセも，「でも個人がそれに対抗してできることは何もない（M.335）」と言い，エルシュナーは「戦争の原因は事柄の必然性であり，個々の人間がそれを変えることはできない」と主張する。それに対しゴットシャルクは，「すべてはまさに個人の行いにかかっている。個人の行いのみに。」とやり返す（M.375）。彼は最後までこの考えを放棄せず，しかも個人として何か全く新しいことをする必要があると考えていた。が，結局考えていた脱走は機会があったにも拘わらず決行せず，彼は急進的な平和主義者であるドミニコ会士のマイゼルに，「君の脱走は他の者が後に続く前例になったかもしれないのに（M.418）」，と非難される。結局ゴットシャルクは英雄ではなかった。あるいはせいぜい「中級の英雄」[178] であった。個人の抵抗は非常に困難な事柄である。ヴェンストゥループの脱走も，宣教師マイゼルの必死の平和活動も，戦争の成り行きを変えたりはしなかった。個人の新たな行動が可能かと聞かれてゴットシャルクは，「否，しかしそれを望むことがすでに新しいことへ向かうことなのだ。（M.376）」と答えるしかなかった。

ティムが『モレンガ』で多元的な語りの手法を利用している目的の一つは，作品の最も大きな主題と結びついている。つまり様々な思考様式の検証である。軍人，宣教師，商人，植民地官吏，学者，植民地システムの受益者などが，いかに個人として戦争と関わり，集団としてはいかにして他民族の絶滅を可能にする精神性を持つのかという問いについての検証である。

何が大量殺人を可能にするのか，個人は集団に抗して行動できないのかという二つの問いは，実はティムの個人史を貫いている問いである。2003 年，ティムは第二次世界大戦で戦死した兄を追悼するエッセイ，『私の兄の場

合』[179] を発表する。彼の兄は〝髑髏師団 (SS-Totenkopf-Division)〟と呼ばれたナチスのエリート親衛隊の一員として東部戦線に送られ，そこで戦死した。ティムには年の離れた兄の記憶が殆どないが，兄が戦地で記していた日記が家族に残されており，彼はその日記を手掛かりに兄の行動や感情の再構成を試みる。特にティムが拘るのは，次のような日記の最後の記述である。「これで日記を書くのをやめにしたい。ここで起きているこれほどの残酷な事柄について記録するなんて，意味がないからだ。(A.147)」兄の残した日記に親しんできた子供の頃からこのエッセイの完成に至るまで，始終ティムの脳裏にあったのは次のような疑問である。兄はなぜ親衛隊に志願したのか，〝これほどの残酷さ〟とは何だったのか，彼はその残酷さに対して何らかの個人的抵抗をしたのだろうか。答えのないこれらの疑問は，ティムの子供時代におけるナチズムの記憶と共に彼にとってのトラウマとなっている[180]。人を組織的殺人に駆り立て，個人的抵抗を困難にする精神性はどこから来るのかという疑問が通底しているという意味において，M. ヒールシャーが言うように『モレンガ』と『私の兄の場合』は円環を成している[181]。ハーマンとのインタヴューにおいてティムは，『モレンガ』においては植民地での絶滅戦争にみられたような冷血さを可能にする精神性や情動とは何かを考え，それを描きたかったと語っている[182]。例えばティムが特別な関心を持ったのは，原住民に対する鞭打ち・殴打の懲罰（Prügelstrafe）である。これは原住民の使用人の怠惰や不服従に対して教育的措置と称して与えられた罰であるが[183]，時には死に至らしめるものとしてドイツの植民地では悪名高いものであった[184]。どんな些細な違反にも鞭打ち 25 回の罰が定められていたので，例えば独領カメルーンは〝the twenty five country〟と呼ばれており，独領トーゴではある地方出身のドイツ人が知り得る唯一の英語が〝twenty　five〟であったと言う[185]。ティムによると，どのヨーロッパ植民地でもこのような懲罰が行われていたものであるが，ドイツのように詳細な規則を作り，官僚的・組織的にそれを行った国はなかった[186]。『モレンガ』の中でも植民地省による詳細な鞭打ち・殴打の規則とそれに関する熱心な議論が紹介されている (M.151-156)。

この組織的な暴力は，ティムにとってはナチスの記憶と直接結びつくものであり，それは『私の兄の場合』にも反映されている。1940 年生まれのティムにとって，ナチズムは戦後すぐに消滅したものなどではなかった。彼は第二次大戦時に空軍兵士であった父親によってプロイセン式の厳しい躾を受け，父親に対して「憎しみ，怒り，軽蔑（A.131）」とも呼べるような反感を持つに至る。父親との関係は命令と服従の連鎖で成り立っているかのように思われた。そしてナチスの罪に関する父親の弁明の言葉は，「命令されてやったこと（Befehlsnotstand）」というものであった（A.131）。しかもその頃は「司法，軍部，財界のあらゆる場所にナチがいた[187]」。「裁判官として，医者として，警官として，教授として，彼らは帰ってきた。（A.131）」そして「暴力は普通のことだった。あらゆる場所で人が殴られた。ただの暴力によって，信念によって，教育的配慮によって，学校でも，家庭でも，街頭でも。（A.145）」身体に加えられる危害をとりわけ嫌った少年ティムにとっては，不幸な時代であった。書くことは彼にとって，言わば父親の抑圧に対する正当防衛であった[188]。従って，組織的な暴力，殺人の際の冷血さ，服従の強制という現象を考えるだけでも，自分にとってドイツの植民地支配はナチスの「殺人産業」に繋がるものだと彼は言う[189]。その上，絶滅命令や強制収容所による大量殺人を行った「ヘレロ・ナマの蜂起」は，ティムに言わせれば「ホロコーストの原型」[190]，「アウシュヴィッツの先取り」[191] なのである。

ティムに関する単著も著しているヒールシャーは，『モレンガ』はポストコロニアルであるだけでなく〝ポスト-ホロコースト小説〟でもある[192]，と述べているが，ティムの考えをよりよく反映させたいのであれば，むしろ『モレンガ』は〝プレ-ホロコースト小説〟と呼ばれるべきであろう。ポスト-ホロコースト的であるのはむしろ『私の兄の場合』，さらにはその 2 年後に発表された『友と異邦人』[193] ではなかろうか。後者においてティムは，大学進学以前の親友であり，1967 年の反パーレヴィ国王デモの際に殺害されたベンノ・オーネゾルクを，〝帰ってきたナチス〟であった警察と司法の犠牲者と見なしているからである。

いずれにせよ『モレンガ』におけるゴットシャルクの問いは，ヘルマントが指摘する通り，いかなる善意を以てしても解決できない課題に属する[194]。400 頁を超すこの長い物語は，ゴットシャルクが教授と呼ばれる存在になり，ドイツのアルゴイ地方で気球に乗っている場面で終わるが，この場面は幻想的であると同時に象徴的でもある。気球はゴットシャルクがアフリカにいた時から，どんな境界も物理的に侵犯することなく乗り越えていき，燃料消費による環境破壊も少ない理想的な乗り物として考えていたものである。しかしそれはどこにも係留点を持つことなく風まかせに浮遊し，安定した立脚点を欠く。ゴットシャルクは浮遊することによってかつての問いかけから逃避したのであろうか？パーケンドルフがこの場面を解釈して「すべての問いは開かれたままである」[195] と解説するのに対し，クスラーは「問いは読者がその都度自分で開くものである」[196] と反論している。両者ともに正しいのであるが，文学研究者としては，今後の読者によってどのように問いが開かれ続けていくのかに留意し続けたいものである。

9．植民地・ジェノサイド・ホロコーストを巡る議論

「作家の偉大さは詰まる所，どれだけ早く時代を先取りし，如何に比類なき仕事をしたかによって測られる」とドゥルツァクは言い，正当に評価されるまで約 20 年を要し，作家世代特有の特徴を持たぬ『モレンガ』を称賛している[197]。この作品が 90 年代に入って話題の対象となり始めた理由としては，冒頭で言及したようにポストコロニアルなディスコースがドイツでも一般的になったこと，ナミビアが独立して歴史研究が容易になる一方でドイツとナミビアとの間に賠償問題という問題が浮上し，この国に対する関心が高まったこと等の現象があるが，最後にジェノサイド研究の進展とこの作品の関わりについて述べてみたい。

「ヘレロ・ナマの蜂起」が 20 世紀最初のジェノサイドとして認知されている点については既に述べた。しかしジェノサイドという概念はそれほど古い

ものではない。ジェノサイドと呼ばれる現象は1948年にラファエル・レムキンの提唱により，国連総会議決とジェノサイド条約によって国際法に対する犯罪として定義された。条約締結の当初，ジェノサイドの概念が妥当すると考えられたのは，オスマン帝国下におけるアルメニア人の殺害とナチスによるユダヤ人の迫害であったが，それは特定の責任を追及して訴追に至らしめるという性質のものではなかった。ジェノサイド条約の定義に照らして犯罪と認められる事項について管轄権を有する国際裁判所が存在しなかったからである。よってこの条約は成立後半世紀にも渡って適用されることがなかった。しかし1998年になって国際刑事裁判所（ICC）の設立規定が採択されると，ジェノサイドの刑事責任を特定した訴追の可能性が開かれる機運が見えてくる。同年のICC会議では，ジェノサイドの罪を1947年のジェノサイド条約と同じ表現で採用し，国際法上のジェノサイド概念が確定した[198]。また，ベルギー政府は1999年に国際人道法違反処罰法を改正し，「世界のどこで行われたものであろうと，犯行者や被害者の国籍がどこであろうと，国際人道法の重大な違反行為についてはベルギーの国内裁判所に訴追して裁判を行うことができる」[199]という決定を下したのである。このような背景を梃子にして，世界のジェノサイド研究は急速に進展を見せるようになった。以前にも世界各地のジェノサイドについては言及されていたが，条約の適用がなかったためにジェノサイドの罪の解釈論が十分に展開されていたとは言い難かった。しかし21世紀に入り，2002年に国際刑事裁判所が設立されると，多くのジェノサイド研究書や専門雑誌が刊行されるようになる。「ヘレロ・ナマの蜂起」については，既にレムキンがジェノサイドの概念規定を構想していた頃に，ヘレロ絶滅作戦をジェノサイドに相当するものと考えていたらしいが，彼は南西アフリカやコンゴにおける多大な人命喪失を糾弾はしても，ヨーロッパによるアフリカ支配は必要であると考える植民地主義者であったと言う[200]。結果として当時のジェノサイド概念から植民地における殺戮は排除されてしまった。国際的に「ヘレロ・ナマの蜂起」がジェノサイドとして認知されるようになったのは，1985年に出された国連のウィティカー・レポート

以降である[201]。グリュンダーは既にその年,『ドイツ植民地の歴史』の中でジェノサイドという用語を用い，トロータの絶滅命令を「ジェノサイド命令(Genozid-Befehl)」[202] と呼んでいる。しかしドイツ語の文脈においては，ジェノサイドに加え，「民族虐殺」にあたる〝Völkermord〟という言葉が今日でも使用されている。

近年この植民地戦争が 20 世紀最初のジェノサイドとして殆どのジェノサイド研究書で論じられるようになる[203] のと時を同じくして，ナミビアの人々によってドイツ企業と政府を相手にした戦争賠償請求の訴訟が起こされるようになってきた[204]。さらに同時に生じているのが，この植民地ジェノサイドとユダヤ人に対するホロコーストとの同質性を論じる歴史研究の方向性である。ドイツによる植民地支配と第三帝国の連関に関する議論は，もともと H. ブライがその規範的な研究書『ドイツ領南西アフリカにおける植民地支配と社会構造』において，南西アフリカにおけるドイツの支配形態を，全体主義の起源はアフリカの植民地支配にあるとしたハンナ・アーレントの主張の証左であると述べた[205] ことに始まりを持つ。そしてその見解は P. シュミット-エーグナーの『植民地主義とファシズム』[206] に引き継がれ，現在はドイツ語圏における植民地･ジェノサイド研究の第一人者とも言うべきユルゲン･ツィマラーが，植民地戦争後の時代を含めた南西アフリカにおけるドイツの支配とヒトラーの東方征服戦略には構造的な類似点があるという説得力のある論を展開している[207]。多くの研究者がこのような視座を支持してはいるが，勿論反論もある。例えば，植民地における人種差別とドイツにおける反ユダヤ主義は異質のものであるという説や[208]，植民地戦争とホロコーストの比較は,「ドイツの歴史記述において，第三帝国の陰から独立した場所に植民地支配それ自体の正当な場所を設ける試みを挫折させる恐れがある」[209] という批判，また，ドイツ史の発想に合わせてナミビア史を裁断するのはドイツ中心主義的であるとするもの[210]，あるいは被害者の意識に観点を移せば,「ヘレロ」を「ユダヤ人」に重ね合わせて「被害」を語ることは民族本質主義的な方向を強化してしまう[211]，という意見等である。ジェノサイドとホロコース

トの比較という問題は稿を改めて論じられるべき性質のものであり，ここで詳細に踏み込むことはできないが，ティムとの関連において述べておくべきは，およそ以下の点であろう。

『モレンガ』はドイツ植民地支配の歴史において起きた絶滅戦争を告発し，アフリカ史における意味での修正主義的批判を加えた初めてのポストコロニアル小説であったが，ドイツの植民地戦争をホロコーストの原型と捉える視点においてもジェノサイド研究家たちに先んじていた。ティムの作家研究においてこのジェノサイドとホロコーストの比較はようやくアフリカ・ディスコースが新時代を迎えた 90 年代半ばから言及されるようになったが，文学研究の領域においては，その比較はやはり一つの〝革新〟として肯定的に捉えられている。しかし，その比較がドイツ中心主義的から逃れるのは困難である。なぜ自分の民族には二度の絶滅戦争が可能だったのかという問いは，確かにあくまでもドイツ人のものであり，『モレンガ』は幾人かの批評家が言うように，アフリカではなくてドイツに関する物語だからである[212]。ティム自身も『モレンガ』による試み，つまりプレ-ホロコーストを語る試みがドイツに関するものことであることを認めている[213]。語りのポリフォニーや魔術的リアリズムを使って歴史の他者を選択的に定義するのを避けようとするのも，スピヴァクが言う通り，所詮「善意に満ちた西洋知識人のための企て」なのである[214]。しかし同時にティムの弁明によると，問題をドイツに引き付けることによって彼が行おうとしたのはヨーロッパ全体の文脈に戻ることであり，最終的にはあらゆるヨーロッパの植民地におけるヨーロッパ中心主義を批判することであった[215]。それは如何に「あくまでヨーロッパの問題である」[216] と言われ続けようと，行わなければならないことである。さらに，ティムがナマの恋人であるカタリーナやモレンガの直接話法による台詞の部分を不自然に思えるほど徹底して空白にしていることも，その空白はなおもテクストのなかに存在しており，なおも自民族中心主義のコンテクストの内部にあるのであって，本来スピヴァクの主張する通り「歴史の他者に引き渡されなければならない」[217] のではあるが，「テクストに書き込まれた空白を前提と

してはじめて」可能になるという，「自分たち自身の生産活動を転位させる」というポストコロニアルな知識人たちの試み[218]の一つとして，評価されるべきではないだろうか。「この小説が書かれてそれが読まれるという事実は歴史理解に対する大きな貢献であるのみならず，それ自体が〝歴史〟である」[219]と言われるのも，その試みが当時の知識人たちにとっても新たな挑戦であったからに他ならない。

ジェノサイドとホロコーストの比較という点に改めて言及するなら，ホロコーストやナチスの東方征服を含めた植民地主義そのものが，本質的にジェノサイド的であるというドミニク・J. シャラーの主張[220]を紹介しておきたい。一見粗雑な議論に聞こえるかもしれないが[221]，植民地主義を「人道に対する罪」として捉える可能性がダーバン会議によって開かれた後，ダーバン・レヴュー会議の失敗を繰り返さないためにも，ホロコーストの特権化から歴史を開放し，植民地主義，あらゆる自民族中心主義，またグローバリゼーションというかたちで継続している植民地主義等の罪に関する認識を共有し，深化させていくためには，比較批判論を控えてこのような大局的な視点に立つ方が建設的なのではなかろうか。アフリカ史研究者の見解としては，ジェノサイド＝ホロコースト連続説や「ドイツの特殊な道」を考慮しながらも，ドイツの植民地戦争を植民地主義総体の歴史の枠組みで捉えることを提唱している A. エッカートの姿勢[222]が，歴史を読み，また書くという行為により多くの読者を誘うものであるように筆者には思われる。『モレンガ』の文学作品としての質の高さは，ポストコロニアルであると同時にプレ-ホロコーストという二つの視座を読者にもたらした点からも測られる。ティムが暗示しようとした「イデオロギーの奈落」[223]の複数性が，グローバルな歴史における暴力の勃発という個々の出来事を想起する想像力を，読者に与えるものだからである。

注

1　現在のナミビア，トーゴ，カメルーン，タンザニア等。
2　永原陽子によると，1884/85 年にベルリンで開かれた「コンゴ会議」の百周年と前後して，主に西ドイツで旧植民地関係の出版物が刊行されるようになったと言う。（永原陽子「「ベルリン＝コンゴ会議 100 周年」と最近のドイツ植民地史関係図書について」In：「現代史研究」Vol.32．1985．64-72 頁．）
3　例として以下のような作品が挙げられる：Gieselher W. Hoffmann: Die schweigenden Feuer (1994); Stefanie Zweig: Nirgendwo in Afrika (1995); Alex Capus: Munzinger Pascha (1997); Hermann Schulz: Auf dem Strom (1998); Kai Meyer: Götter in der Wüste (1999); Jens Johannes Kramer: Die Stadt unter den Steinen (2000); Hans Christoph Buch: Kain und Abel in Afrika (2001); Harald Dietel: Der Lord von Kenia (2002); Gerhard Seyfried: Herero (2003).
4　«Nirgendwo in Afrika（邦題：名もなきアフリカの地で）»（2002），«Eine Liebe in Afrika»（2002），«Kein Himmel über Afrika»（2005），«Die weiße Massai»（2005），«Wiedersehen in Barsaloi»（2005），«Afrika, mon amour»（2006）等．
5　“Unser Afrika”. In: Literaturen. Heft 6. Juni 2002, S. 11.
6　Jürgen Zimmerer: [Rez.] Afrika-Lexikon. In: Literaruten. Heft 6. Juni 2002, S. 92.
7　例えば東ドイツがナミビアの独立闘争を支持し，西ドイツが独立反対派を支援していた事情等については以下を参照：永原陽子「東西ドイツの「統一」とアフリカ」In：林晃史（編）『冷戦後の国際社会とアフリカ』研究叢書，1996，101-143 頁；柴田暖子「ナミビアのドイツ系住民と「言語問題」」In：「現代史研究」Vol. 46．2000，20-34 頁．
8　Dirk Göttsche: Der neue Historische Afrika-Roman: Kolonialismus aus postkolonialer Sicht. In: German Life and Letters. Vol. 56. 2003, S. 261.
9　アフリカ史における「修正主義」とは，ヨーロッパ史におけるのとは異なり，植民地支配を正当化する古い歴史学を批判＝修正する立場を言う。参照：永原陽子「植民地版歴史修正主義あるいは第二の歴史家論争」In：若尾祐司・井上茂子（編）『近代ドイツの歴史』（ミネルヴァ書房）2005，161 頁．
10　Göttsche: Zwischen Exotismus und Postkolonialismus: Der Afrika-Diskurs in der deutschsprachigen Gegenwartsliteratur. In: M. Moustapha Diallo/Dirk Göttsche (Hg.): Interkulturelle Texturen: Afrika und Deutschland im Reflexionsmedium der Literatur. Bielefeld 2003, S. 161.
11　Henning Melber: Our Namibia: a social studies textbook. London 1986.（『わたしたちのナミビア』ナミビア独立支援キャンペーン・京都訳（現代企画室）1990．）
12　その最大組織である南西アフリカ人民機構（SWAPO）は，独立後に政党となって現在も政権を担当している。
13　永原陽子「『植民地責任論』試論 ── ヘレロ補償問題を手がかりに ──」In：「歴史評論」677．2006，2-18 頁；同「ドイツと西南アフリカ／ナミビア ── 植民地をめぐる「過去の克服」──」In：「ドイツ研究」41．2007，13-30 頁；同「ナミビアの植民地戦争と「植民地責任」── ヘレロによる補償要求をめぐって」In：永原

陽子（編）『「植民地責任」論』（青木書店）2009，240 頁.

14　2004 年から 2005 年にかけて，ナミビアとドイツの関係に関する「ナミビア-ドイツ：分断された歴史：抵抗・暴力・記憶」という展覧会がケルンのラウテンシュトラオホ-イェースト民族学博物館とベルリンの歴史博物館において開催された。またテレビ局のドイツ第二放送（ZDF）は，2005 年 11 月 8/15/22 日に「ドイツの植民地（Deutsche Kolonien）」という 3 回シリーズのドキュメンタリー番組を放映した。

15　賠償問題に関する研究書の一例として以下を参照：Janntje Böhlke-Itzen: Kolonialschuld und Entschädigung: Der deutsche Völkermord an den Herero (1904-1907). Frankfurt a.M. 2004; Jeremy Sarkin: Colonial Genocide and Reperations Claims in the 21st Century: The Socio-Legal Context of Claims under International Law by the Herero against Germany for Genocide in Namibia, 1904-1908. Praeger Security International 2009.

16　Uwe Timm: Morenga. Köln 1978.

17　Timm: Die Entdeckung der Currywurst. Köln 1999.（『カレーソーセージをめぐるレーナの物語』浅井晶子訳（河出書房新社）2005.）

18　Timm: Rennschwein Rudi Rüssel. Zürich 1989.（『わたしのペットは鼻づらルーディ』平野卿子訳（講談社）1991.）

19　Timm: Am Beispiel meines Bruders. Köln 2003; Ders.: Der Freund und der Fremde. Köln 2005.

20　Timm: Heißer Sommer. Köln 1972.

21　Helmut Bley: Unerledigte deutsche Kolonialgeschichte. In: Entwicklungspolitische Korrespondenz (Hg.): Deutscher Kolonialismus. Hamburg 1991, S. 14; Uwe Timm: Deutsche Kolonien. München 1981, S. 7; Jost Hermand: Afrika den Afrikanern!: Timms *Morenga*. In: Manfred Durzak/Hartmut Steinecke (Hg.): Die Archäologie der Wünsche. Köln 1995, S. 47ff; Joachim Zeller: Symbolische Politik: Anmerkungen zur kolonialdeutschen Erinnerungskultur. In: Jürgen Zimmerer/Joachim Zeller (Hg.): Völkermord in Deutsch-Südwestafrika. Berlin 2003, S. 198.

22　Gesine Krüger: Vergessene Kriege: Warum gingen die deutschen Kolonialkriege nicht in das historische Gedächtnis der Deutschen ein? In: Nikolaus Buschmann/Dieter Langewiesche (Hg.): Der Krieg in den Gründungsmythen europäischer Nationen und der USA. Frankfurt a.M. 2003, S. 120f.

23　永原陽子「土地なき民のゆくえ ── ドイツ現代史のなかの「西南アフリカ」──」In：「歴史学研究」第 581 号，38 頁；Russel A. Berman: German Colonialism: Another Sonderweg? In: The European studies journal. Vol. 16. 1999, S. 32.

24　ティムは「ドイツはアフリカで道路や鉄道を建設し，アフリカ人に読み書きを教えた」といった話は 80 年代になっても流布していると指摘している。（Timm: Deutsche Kolonien, S. 7.）

25　Karsten Linne: Deutschland jenseits des Äquators?: Die NS-Kolonialplanungen für Afrika. Berlin 2008, S. 18f.

26　Timm: Deutsche Kolonien, S. 7.

27　Linne: Deutschland jenseits des Äquators?, S. 23ff.

28　Hermand: Afrika den Afrikanern!, S. 49f; Ute Gerhard: Eine „gestaute“

Masse in Bewegung: Der Siedler in „Deutsch-Südwest“ als literarische Figur. In: Sprache im technischen Zeitalter. Vol. 168. Dezember 2003, S. 415ff.

29 Linne: Deutschland jenseits des Äquators?, S. 72–83.

30 Hans Grimm: Volk ohne Raum. München 1926.（『土地なき民』星野慎一訳（鱒書房）1940）

31 Linne: Deutschland jenseits des Äquators?, S. 34ff; Birthe Kundrus: Blind Spots: Empire, Colonies, and Ethnic Identities in Modern German History. In: Karen Hagemann/Jean Helen Quataert (Hg.): Gendering modern German History. Berghahn Books 2007, S. 91；この学校に関する次の記録映画も参照：Tink Diaz: «Wir hatten eine Dora in Südwest». 1992.

32 «Die Reiter von Deutsch-Ostafrika» (1934), «Die Wildnis stirbt» (1936), «Unser Kamerun» (1937), «Deutsches Land in Afrika» (1939), «Carl Peters» (1941), «Ohm Krüger» (1941), «Germanin» (1943)等.（参照：Konstanze Streese: „Cric?“-„Crac!“: Vier literarische Versuche, mit dem Kolonialismus umzugehen. Bern/Berlin/Frankfurt a.M. 1991, S. 69.）

33 Paul Michael Lützeler: Einleitung: Postkolonialer Diskurs und deutsche Literatur. In: Ders. (Hg.): Schriftsteller und “Dritte Welt”. Tübingen 1998, S. 25ff; Ders.: Postmoderne und postkoloniale deutschsprachige Literatur. Bielefeld 2009, S. 96.

34 Bley: Unerledigte deutsche Kolonialgeschichte, S. 14.

35 Bley: Unerledigte deutsche Kolonialgeschichte, S. 11f; Timm: Deutsche Kolonien, S. 7.ブライの説によると，この目論見はアフリカとの人脈の欠如および東西の陣営にこだわる〝ハルシュタイン・ドクトリン〞のせいで成功しなかった。次も参照：永原陽子「東西ドイツの「統一」とアフリカ」，101–143 頁.

36 Bley: Unerledigte deutsche Kolonialgeschichte, S. 11; Henning Melber: »Wir haben überhaupt nicht über Reparationen gesprochen«. In: Zimmerer/Zeller (Hg.): Völkermord in Deutsch-Südwestafrika, S. 223.

37 Manfred Durzak: Die Position des Autors: Ein Werkstattgespräch mit Uwe Timm. In: Ders./Steinecke (Hg.): Die Archäologie der Wünsche, S. 324.

38 Krüger: Vergessene Kriege, S. 121.

39 Zeller: Symbolische Politik, S. 198.

40 Lora Wildenthal: The Place of Colonialism in the Writing and Teaching of Modern German History. In: The European studies journal. Vol. 16. 1999, S. 9, 13.

41 Streese: „Cric?“-„Crac!“, S. 14ff; Timm: Deutsche Kolonien, S. 7f.

42 Horst Drechsler: Südwestafrika unter deutscher Kolonialherrschaft, Berlin (DDR) 1966; Helmut Bley: Kolonialherrschaft und Sozialstruktur in Deutsch-Südwestafrika 1894–1914. Hamburg 1968.

43 Timm: Deutsche Kolonien, S. 7.

44 注 2 参照.

45 Horst Gründer: Geschichte der deutschen Kolonien. Paderborn 1985, S. 7.

46 Lützeler: Einleitung: Postkolonialer Diskurs und deutsche Literatur, S. 22f; Ders.: Postmoderne und postkoloniale deutschsprachige Literatur, S. 94ff.

47 Andreas Eckert: Namibia－ein deutscher Sonderweg in Afrika? In: Zimmer-

er/Zeller (Hg.): Völkermord in Deutsch-Südwestafrika, S. 231.

48 岡倉登史「タンザニアにおけるマジマジ反乱（1905-1907）── 原因・組織とイデオロギー・経過・影響 ──」In：「駿台史学」Vol.36．1975，52-79 頁；Felicitas Becker/Jigal Beez (Hg.): Der Maji-Maji-Krieg in Deutsch-Ostafrika: 1905-1907. Berlin 2005.

49 Krüger: Vergessene Kriege, S. 134; Eckert: Namibia－ein deutscher Sonderweg in Afrika?, S. 231.

50 Joachim Warmbold: Germania in Africa: Germany's Colonial Literature. Peter Lang 1989, S. 1.

51 A & M. Mitscherlich: Die Unfähigkeit zu trauern. München 1977, S. 31.（A & M. ミチャーリッヒ『喪われた悲哀』林峻一郎・馬場謙一訳（河出書房新社）1984，30 頁．）

52 Warmbold: »Ein Stückchen neudeutsche Erd'...«. Frankfurt a.M. 1982, S. 2.

53 Bley: Unerledigte deutsche Kolonialgeschichte, S. 14.

54 A & M. Mitscherlich: Die Unfähigkeit zu trauern, S. 31.（A & M. ミチャーリッヒ『喪われた悲哀』，30，31 頁．）

55 Warmbold: »Ein Stückchen neudeutsche Erd'...«, S. 68.

56 John Noyes: Colonial space: spatiality in the discourse of German South West Africa 1884-1915. Routledge 1992, S. 3.

57 Berman: Der ewige Zweite: Deutschlands Sekundärkolonialismus. In: Birthe Kundus (Hg.): Phantasiereiche: Zur Kulturgeschichte des deutschen Kolonialismus. Frankfurt a.M. 2003, S. 20; Noyes: Colonial space, S. 2ff.

58 J. ヴァルムボルトはテル・アヴィヴ大学の学者である。

59 Gustav Frenssen: Peter Moors Fahrt nach Südwest. Berlin 1906.

60 Frenssen: Jörn Uhl. Berlin 1901.

61 John K. Noyes: National Identiy, Nomadism, and Narration in Gustav Frenssen's Peter Moor's Journey to Southwest Africa. In: Sara Friedrichsmeyer/ Sara Lennox/ Susanne Zantop (Hg.): The Imperialist Imagination: German Colonialism and Its Legacy. The University of Michigan Press 1998, S. 89.

62 Medardus Brehl: »Das Drama spielt sich auf der dunklen Bühne des Sandfeldes ab«. In: Zimmerer/Zeller (Hg.): Völkermord in Deutsch-Südwestafrika, S. 88.

63 Rolf Parr: Nach Gustav Frenssens Peter Moor. In: Sprache im technischen Zeitalter, Vol. 168. 2003, S. 396; Warmbold: »Ein Stückchen neudeutsche Erd'...«, S. 95.

64 Krüger: Vergessene Kriege, S. 129.

65 Brehl: »Das Drama spielt sich auf der dunklen Bühne des Sandfeldes ab«, S. 86.

66 Sybille Benninghoff-Lühl: Deutsche Kolonialromane 1884-1914. Bremen 1983.

67 池田浩士『ファシズムと文学』（白水社）1978，78 頁．

68 Parr: Nach Gustav Frenssens Peter Moor, S. 397.

69 Grimm: Südafrikanische Novellen. Lippoldsberg 1913.

70 Grimm: Afrikafahrt West. Frankfurt a.M. 1913.
71 池田浩士『ファシズムと文学』，99 頁.
72 Henny Koch: Die Vollrads in Südwest. Stuttgart 1910.
73 Paul Michael von Lettow-Vorbeck: Heia Safari! Deutschlands Kampf in Ostafrika. Leipzig 1920.
74 Lützeler: Postmoderne und postkoloniale deutschsprachige Literatur, S. 96.
75 Sybille Benninghoff-Lühl: "Ach, Afrika! Wär' ich zu Hause": Gedanken zum Deutschen Kolonialroman der Jahrhundertwende. In: Renate Nestvogel/ Rainer Tetzlaff (Hg.): Afrika und der deutsche Kolonialismus: Zivilisierung zwischen Schnapshandel und Bibelstunde. Berlin 1987, S. 96.
76 Krüger: Vergessene Kriege, S. 129.
77 Hugh Ridley: Germany in the Mirror of its Colonial Literature. In: German Life & Letters. Vol. 28. 1975. No. 4, S. 375ff; Ders.: Colonial Society and European Totalitarianism. In: Journal of European Studies. No. 3. 1973, S. 147.
78 例えばフレンセンの『ペーター・モーアの南西アフリカ行き』は，当時自国の戦争より日露戦争の情勢に向けられていた世論の関心を植民地に引き寄せるために書かれたという。（参照：Bley: Kolonialherrschaft und Sozialstruktur in Deutsch-Südwestafrika 1894-1914, S. 201.）
79 Friederike Eigler: Engendering German Nationalism: Gender and Race in Frieda von Bülow's Colonial Writings. In: Friedrichsmeyer/Lennox/Zantop (Hg.): The Imperialist Imagination: German Colonialism and Its Legacy, S. 69.
80 Frieda von Bülow: Reisescizzen und Tagebuchblätter aus Deutsch-Ostafrika. Berlin 1889; Tropenkoller. Berlin 1896; Im Lande der Verheißung. Dresden 1899.
81 Warmbold: »Ein Stückchen neudeutsche Erd'...«, S. 68.
82 Berman: Enlightenment of Empire: Colonial Discourse in German Culture. University of Nebraska Press 1998, S. 171-202.
83 Gustav Bolle: Unsere Kolonien. Berlin 1890.
84 Theodor Hertzka: Freiland: ein socials Zukunftsbild. Leipzig 1890.
85 ルイス・マンフォード『新版　ユートピアの系譜』関裕三郎訳（新泉社）2000，131 頁；Hertzka: Freeland. BiblioBazaar LLC 2008, S. 7f.
86 Ridley: Germany in the Mirror of its Colonial Literature, S. 385; Noyes: National Identity, Nomadism, and Narration in Gustav Frenssen's Peter Moor's Journey to Southwest Africa, S. 93.
87 Ridley: Germany in the Mirror of its Colonial Literature, S. 377.
88 Grimm: Volk ohne Raum. 2. Bd, S. 603-606.（『土地なき民』星野慎一訳，第四巻，415-419 頁.）
89 Ridley: Colonial Society and European Totalitarianism, S. 152；池田浩士『ファシズムと文学』，102-108 頁.
90 Ridley: Colonial Society and European Totalitarianism, S. 152ff.
91 Grimm: Von der bürgerlichen Ehre und bürgerlichen Notwendigkeit. München 1932, S. 15.
92 池田浩士『ファシズムと文学』，122-125 頁.
93 Albert Gouaffo: Wissens- und Kulturtransfer im kolonialen Kontext: das

Beispiel Kamerun-Deutschland (1884–1919). Würzburg 2007, S. 28.

94 Heinrich Norden: Der Neffe des Zauberers. Basel 1913.

95 例えばW.グリンガがフリーダ・フォン・ビューローを「植民地のエフィ・ブリースト」と呼んだことも，このように考えると説得力を持つ。(Werner Glinga: Life Story, Utendi, and Colonial Novel: Literature in "German East Africa". In: Afrika und Übersee. Vol. 70. 1987, S. 274.)

96 Krüger: Vergessene Kriege, S. 129.

97 Streese: „Cric?"-„Crac!", S. 15.

98 Ibid., S. 11ff; Lützeler: Einleitung: Der postkoloniale Blick. In: Ders. (Hg): Der postkoloniale Blick: Deutscher Schriftsteller berichten aus der Dritten Welt. Frankfurt a.M. 1997, S. 11ff; Ders.: Einleitung: Postkolonialer Diskurs und deutsche Literatur, S. 26ff; Ders.: Postmoderne und postkoloniale deutschsprachige Literatur, S. 99ff; Arlene Akiko Teraoka: East, West, and Others: the Third World in Postwar German Literature. Nebraska Press 1996, S. 27ff.

99 Hans Magnus Enzensberger: Das Verhör von Habana. Frankfurt a.M. 1970.

100 Peter Weiss: Vietnam-Diskurs. Frankfurt a.M. 1968.

101 Rudi Dutschke: Die geschichtlichen Bedingungen für den internationalen Emanzipationskampf. In: Uwe Bergmann/Rudi Dutschke/Wolfgang Lefévre/Bernd Rabehl: Rebellion der Studenten oder die neue Opposition. Reinbek bei Hamburg 1968, S. 91.（ルディ・ドゥチュケ「国際的解放闘争のための歴史的条件」In：ルディ・ドゥチュケ（他）『学生の反乱』船戸満之訳（合同出版）1968，141頁.）

102 Dutschke: Vom Antisemitismus zum Antikommunismus. In: Rebellion der Studenten oder die neue Opposition, S. 62f.（ドゥチュケ「反ユダヤ主義から反共へ」In：『学生の反乱』，93，107頁.）

103 西ドイツは南アフリカと軍事産業による関わりを持ち，また西ドイツのコンツェルンがコンゴ＝カタンガ企業に参加しようとしていた。

104 Uwe Soukup: Wie starb Benno Ohnesorg? Berlin 2007, S. 242.

105 Colin Riordan: »Eine Deklaration gegen Gewalt und Tod«: Gespräch mit Uwe Timm. In: David Basker (Hg.): Uwe Timm. Cardiff 1999, S. 32.

106 フィヒテはカリブや南米，ブッブは主にハイチを題材にしている：Hubert Fichte: Xango (1984), Petersilie (1980), Forschungsbericht (1989); Hans Christopf Buch: Die Hochzeit von Port-au-Prince (1984), Haiti Chérie (1990), Rede des toten Kolumbus am Tag des Jüngsten Gerichts (1992)等.

107 Lützeler: Postmoderne und postkoloniale deutschsprachige Literatur, S. 94.

108 Anna Seghers：Karibische Geschichten（カリブ），Günter Grass：Zunge Zeigen（インド），Ingeborg Drewitz：Mein indisches Tagebuch（インド），Luise Linser：Dem Tode geweiht? Lepra ist heilbar!（インドネシア），Peter Schneider：Die Botschaft des Pferdekopfs（南米），Franz Xaver Kroetz：Nicaragua Tagebuch（ニカラグア），Hugo Loetscher：ZehnJahre Fidel Castro（キューバ），Ders.：Wunderwelt（ブラジル），Martin Walser：Variationen eines Würgegriffs（トリニダード）等.

109 Ingeborg Bachmann: Der Fall Franza. (1966) In: Ingeborg Bachmann

Werke1-4. 3Bd. München/Zürich 1984.
110 Klaus Stephan: Ein feiner Patriot. München 1976.
111 Göttsche: Der neue Historische Afrika-Roman, S. 263.
112 ヨースト・ヘルマントによると，南西アフリカでの体験を懐古的に述懐するエッセイがいくつか書かれたという。(Hermand: Afrika den Afrikanern!, S. 50f.)
113 Hugh Ridley: Die Geschichte gegen den Strich lesend: Uwe Timms *Morenga*. In: Anne Fuchs/Theo Harden (Hg.): Reisen im Diskurs: Modelle der literarischen Fremderfahrung von den Pilgerberichten bis zur Postmoderne. Heidelberg 1995, S. 364.
114 Riordan: »Eine Deklaration gegen Gewalt und Tod«, S. 31.
115 Timm: Heißer Sommer, München (DTV) 1998, S. 143.
116 ヴィスマン記念碑については次を参照：Joachim Zeller: Kolonialdenkmäler und Geschichtsbewußtsein: eine Untersuchung der kolonialdeutschen Erinnerungskultur. Berlin 1999, S. 206ff.
117 Timm: Das Nahe, das Ferne, Schreiben über fremde Welten. In: Martin Hielscher (Hg.): Uwe Timm Lesebuch: Die Stimmen beim Schreiben. München 2005, S. 330.
118 Ibid., S. 330.
119 Ibid., S. 330.
120 Timm: Wo die Weißen schwarz sehen: Eindrücke einer Recherchereise nach Namibia im Jahr 1976. In: Hielscher (Hg.): Uwe Timm Lesebuch, S. 53.
121 Timm: Heißer Sommer, S. 148.
122 Parr: Nach Gustav Frenssens Peter Moor, S. 407.
123 Göttsche: Der neue Historische Afrika-Roman, S. 266.
124 Durzak: Die Position des Autors, S. 323.
125 Durzak: Zweimal Deutsch-Südwestafrika: Uwe Timms Roman *Morenga* und Gerhard Seyfrieds Roman *Herero*. In: David Basker (Hg.): Uwe Timm II, S. 37.
126 Göttsche: Der neue Historische Afrika-Roman, S. 266.
127 「ヘレロ・ナマの蜂起」については以下の文献を参照：岡倉登史「ナミビアにおける反乱（1904〜1908）── 原因・経過・意義と影響」In：「歴史学研究」第 449 号．1977，31-37 頁；永原陽子「ドイツ帝国主義と植民地支配」In：「歴史学研究」第 496 号．1981，19-35 頁；同「アパルトヘイトと「エスニシティ」── ナミビアの歴史から考える」In：「歴史学と教育」11 号．1992，20-44 頁；同「「人種戦争」と「人種の純粋性」をめぐる攻防 ── 20 世紀初頭の西南アフリカ」In：歴史学研究会（編）『帝国への新たな視座』（青木書店）2005，323-370 頁；同「ドイツと西南アフリカ／ナミビア ── 植民地をめぐる「過去の克服」──」，13-30 頁；同「ナミビアの植民地戦争と「植民地責任」── ヘレロによる補償要求をめぐって」，218-248 頁．
128 蜂起の理由については諸説がある。ドイツ人による土地と家畜の収奪が蜂起に至らしめたという説(岡部)，ドイツ法下によるあまりの不公平と懲罰や強姦に対する怒りによるという説(ドレクスラー，グリュンダー)，民族グループの首長らがドイツ政府に従属させられたことにより政治的権威を奪われ，心理的・社会

的不安が生じたというブライの説，また，軍事的衝突を必至と見たドイツ兵の強迫観念が衝突を誘発したという説（ヘーヴァルト）等である。(Vgl. Jan-Bart Gewald: Herero Heroes: A Socio-Political History of the Herero of Namibia 1890-1923. James Currey & Ohio University Press 1999, S. 142ff.)

129　Drechsler: Südwestafrika unter deutscher Kolonialherrschaft, S. 252.ただしこの死者数については異論もあるらしい。(永原陽子「ドイツと西南アフリカ／ナミビア ── 植民地をめぐる「過去の克服」──」，22 頁.)

また，ドイツ人の死者は約 1,400 人だったと言う。(Gründer: Geschichte der deutschen Kolonien, S. 121.)

130　本文中〝M〟に続く引用頁は以下の版による。Timm: Morenga. München (DTV) 2005.

131　正式にはモレンガの名は〝Marengo〟であるが，当時ドイツ人の間では〝Morenga〟として知られており，ティムはその歴史性を重視するために意図的に〝Morenga〟を採用している。(Christof Hamann/Uwe Timm: „Einfühlungsästhetik wäre ein kolonialer Akt“: Ein Gespräch. In: Sprache im technischen Zeitalter, Vol. 168. 2003, S. 454.)

132　Drechsler: Südwestafrika unter deutscher Kolonialherrschaft, S. 206; Heinrich Roth: Propheten-Partisanen-Präsidenten: Afrikanische Völksführer und ihre Widersacher. Berlin (DDR) 1973, S. 54ff.

133　Heinrich Roth: Propheten-Partisanen-Präsidenten, S. 56; Gunther Pakendorf: Morenga: Oder Geschichte als Fiktion. In: Acta Germanica. Vol. 19. 1988, S. 147.

134　Pakendorf: Morenga: Oder Geschichte als Fiktion, S. 145-148.ナミビアの独立後，独立闘争の闘志たちの〝名誉回復〟が始まり，モレンガの名も指導者の一人として記述・記憶されるようになっている。(Joachim Zeller: Symbolische Politik, S. 204; Melber: Our Namibia, S. 81ff.)（『わたしたちのナミビア』，132-138 頁.）

135　Bley: Kolonialherrschaft und Sozialstruktur in Deutsch-Südwestafrika 1894-1914.

136　Lutz Hagestedt: Von essenden Sängern und singenden Ochsen: Sprechsituation bei Uwe Timm. In: Die Archäologie der Wünsche, S. 246.ハーゲシュッテットはファクションの好例としてカポーティの『冷血』とメルヴィルの『白鯨』を挙げている。

137　Ted Norris: Literatur und Ethnologie des 20. Jahrhunderts: Hubert Fichte, Bruce Chatwin und Uwe Timm. In: Archäologie der Wünsche, S. 280.

138　Keith Bullivant: The Writer as Anthropologist: The Works of Uwe Timm. In: David Basker (Hg.): Uwe Timm, S. 40; Ridley: Die Geschichte gegen den Strich lesend, S. 359; Brehl: »Das Drama spielt sich auf der dunklen Bühne des Sandfeldes ab«, S. 96.

139　実際には 1893 年にナマの集落を急襲して 78 人の婦女子を殺害し，戦いの連鎖の口火を切ったのはドイツ軍である。(Drechsler: Südwestafrika unter deutscher Kolonialherrschaft, S. 79)

140　クロポトキンの『相互扶助論』はゴットシャルクがアフリカへ渡った 1904 年，グスタフ・ランダウアーの翻訳によってライプツィヒから出版されている。

141 クロポトキン『相互扶助論』大杉榮訳（春陽堂書店）1917，頁 137 ff.
142 和名は〝光堂〞である。
143 Ridley: Die Geschichte gegen den Strich lesend, S. 367.
144 リオルダンは『モレンガ』を，エコロジー意識を表現した先駆的文学作品として捉えている。(Riordan: 'Der Weg in die Zukunft': Uwe Timm and the Problem of Political Ecology. In: David Basker (Hg.): Uwe Timm, S. 66.)
145 Hermand: Afrika den Afrikanern!, S. 59.
146 Rainer Kußler: Interkulturelles Lernen in Uwe Timms *Morenga*. In: Die Archäologie der Wünsche, S. 65ff; Peter Horn: Fremdsprache und Fremderlebnis: Dr. Johannis Gottschalks Lernprozeß in Uwe Timms *Morenga*. In: Jahrbuch Deutsch als Fremdsprache. Vol. 14. 1998, 75ff.
147 Sabine Wilke: "Hätte er bleiben wollen, er hätte anders denken und fühlen lernen müssen": Afrika geschildert aus Sicht der Weißen in Uwe Timms *Morenga*. In: Monatshefte. Vol. 93. No. 3. 2001, S. 347.
148 Ridely: Die Geschichte gegen den Strich lesend, S. 364.
149 Ibid., S. 371.
150 Ulrich Simon: Die Leistung des Scheiterns: Widerstehen als Thema und als Problem in Uwe Timms Texten. In: Friedhelm Marx (Hg.): Erinnern Vergessen Erzählen: Beiträge zum Werk Uwe Timms. Göttingen 2007, S. 203.
151 Kußler: Interkulturelles Lernen in Uwe Timms *Morenga*, S. 90.
152 熊谷一男『ドイツ帝国主義論』(未来社) 1973，186，187 頁；Leonhard Harding: Die Berliner Westafrikakonferenz von 1884/1885 und der Hamburger Schnapshandel mit Westafrika. In: Nestvogel/Tetzlaff (Hg.): Afrika und der deutsche Kolonialismus: Zivilisierung zwischen Schnapshandel und Bibelstunde. Berlin 1987, S. 19-40; Heiko Möhle: Mit Branntwein und Gewehr. In: Ders. (Hg.): Branntwein, Bibeln und Bananen. Hamburg 1999, S. 3-45.
153 南西アフリカで最初に土地買収を行ったブレーメンの商人アドルフ・リューデリッツが，ナマの土地を買収した際，ナマたちが法定マイル（1.61 Km）の存在しか知らないことを知りながら，契約後にドイツ・マイル（7.42 Km）を主張して広大な土地を収奪した。(M.294)
154 後に G. マルケスと始めとするスペイン語文学の独訳者となるダグマール・プレッツ（Dagmar Plötz）である。
155 Hamann/Timm: „Einfühlungsästhetik wäre ein kolonialer Akt", S. 454.
156 Martin Hielscher: Uwe Timm, München 2005, S. 91.
157 Hamann/Timm: „Einfühlungsästhetik wäre ein kolonialer Akt", S. 455.
158 Bullivand: The Writer as Anthropologist, S. 40.
159 Hielscher: Sprechende Ochsen und die Beschreibung der Wolken: Formen der Subversion in Uwe Timms Roman *Morenga*. In: Sprache im technischen Zeitalter. Vol. 168. Dezember 2003, S. 468.
160 Hamann/Timm: „Einfühlungsästhetik wäre ein kolonialer Akt", S. 452ff.
161 Ibid., S. 452.
162 G. C. スピヴァク『サバルタンは語ることができるか』上村忠男訳（みすず書房）1999，65 頁.
163 Ridley: Die Geschichte gegen den Strich lesend, S. 370.

164　Streese, „Cric?“-„Crac!“, S. 189.
165　スピヴァク『サバルタンは語ることができるか』，64 頁．
166　E. W. サイード『文化と帝国主義 1 』大橋洋一訳（みすず書房）1998，特に A. カミュと『異邦人』について．293 頁．
167　Hamann/Timm: „Einfühlungsästhetik wäre ein kolonialer Akt“, S. 452ff.
168　Durzak: Zweimal Deutsch-Südwestafrika, S. 41.
169　サイード『文化と帝国主義 1 』，139 頁．
170　Ibid.，138 頁．
171　Giselher W. Hoffmann: Die schweigenden Feuer. Wuppertal 1994.
172　Dietmar Beetz: Oberhäuptling der Herero. Berlin (DDR) 1983.
173　Steffen Richter: „Hic sund leones“: Die Kolonialkriege in Deutsch-Südwestafrika und die deutschsprachige Gegenwartsliteratur. In: Sprache im technischen Zeitalter. Vol. 168. Dezember 2003, S. 430ff.
174　ホミ・K. バーバ『文化の場所：ポストコロニアリズムの位相』本橋哲也／正木恒夫／外岡尚美／阪本留美訳（法政大学出版局）2005，55，56 頁．
175　Götsche: Der neue Historische Afrika-Roman, S. 286; Hilescher: Uwe Timm, S. 85.
176　サイードが『オリエンタリズム』の序説で行ったドイツ・オリエンタリズムに対する批判を参照にすると興味深い。（エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』今沢紀子訳（平凡社）1986，19 頁．）
177　Wilke: “Hätte er bleiben wollen, er hätte anders denken und fühlen lernen müssen”, S. 352.
178　Kora Baumbach: Verdrängte Kolonialgeschichte: Zu Uwe Timms Roman *Morenga*. In: Monatshefte. Vol. 97. No. 2. 2005, S. 214; Göttsche: Der neue Historische Afrika-Roman, S. 268; Streese: „Cric?“-„Crac!“, S. 89.
179　本文中〝A〞に続く引用頁は以下の版による。Timm: Am Beispiel meines Bruders. München (DTV) 2005.
180　Hielscher: Sprechende Ochsen und die Beschreibung der Wolken, S. 465.
181　Hielscher: Uwe Timm, S. 174.
182　Hamann/Timm: „Einfühlungsästhetik wäre ein kolonialer Akt“, S. 455.
183　Drechsler: Südwestafrika unter deutscher Kolonialherrschaft, S. 151; Bley: Kolonialherrschaft und Sozialstruktur in Deutsch-Südwestafrika 1894-1914, S. 128; Gründer: ...da und dort ein junges Deutschland gründen: Rassismus, Kolonien und kolonialer Gedanke vom 16. bis zum 20. Jahrhundert. München 1999, S. 229ff; Jürgen Zimmerer: Deutsche Herrschaft über Afrikaner: Staatlicher Machtanspruch und Wirklichkeit im kolonialen Namibia. Münster 2002, S. 29.
184　このテーマに関してはいくつか研究書が出ている。Fritz Ferdinand Müller: Kolonien unter der Peitsche: eine Dokumentation. Berlin (DDR) 1962; Gotthilf Walz: Die Entwicklung der Strafrechtspflege in Kamerun unter deutscher Herrschaft 1884-1914. Freiburg im Breisgau 1981; Martin Schröder: Prügelstrafe und Züchtigungsrecht in den deutschen Schutzgebieten Schwarzafrikas. Berlin/Hamburg/Münster 1997.
185　Gründer: ...da und dort ein junges Deutschland gründen, S. 229.

186 Hamann/Timm: „Einfühlungsästhetik wäre ein kolonialer Akt“, S. 459; Riordan: »Eine Deklaration gegen Gewalt und Tod«, S. 33.
187 Riordan: »Eine Deklaration gegen Gewalt und Tod«, S. 29.
188 Ibid., S. 27.
189 Hamann/Timm: „Einfühlungsästhetik wäre ein kolonialer Akt“, S. 459.
190 Durzak: Die Position des Autors, S. 321.
191 Riordan: »Eine Deklaration gegen Gewalt und Tod«, S. 33.
192 Hielscher: Sprechende Ochsen und die Beschreibung der Wolken, S. 465; Ders.: Uwe Timm, S. 85.
193 Timm: Der Freund und der Fremde. Köln 2005.
194 Hermand: Afrika den Afrikanern!, S. 61.
195 Pakendorf: Morenga: Oder Geschichte als Fiktion, S. 157.
196 Kußler: Interkulturelles Lernen in Uwe Timms *Morenga*, S. 90.
197 Duzak: Ein Autor der mittleren Generation. In: Die Archäologie der Wünsche, S. 24,
198 ジェノサイド定義の経緯と解釈については前田朗『ジェノサイド論』（青木書店）2002 を参照。110 頁に引用されている ICC の規定は以下のようである。
ICC 規定第六条　本規定の目的に関して，「ジェノサイド」とは，国民，民族，種族または宗教集団の全部または一部を破壊する意図をもって，次に揚げる行為を行うことを意味する。
a　集団の構成員を殺害すること
b　集団の構成員に対して，重大な身体的または精神的な害悪を加えること
c　集団の全部または一部についてその身体の破壊をもたらすことを意図した集団生活の条件をことさらに押し付けること
d　集団内の出生を妨げることを意図した措置を課すこと
e　集団の子どもを他の集団に強制的に移転すること
199 前田朗『ジェノサイド論』，3 頁.
200 Dominik J. Schaller: Raphael Lemkin’s view of European colonial rule in Africa: between condemnation and admiration. In: Journal of Genocide Research. issue4. 2005, S. 531-538.
201 Icon Group International, Inc. (Hg.): Exterminating: Webster’s Quotations, Facts and Phrases. ICON Group International, Inc. 2008, S. 42,
202 Gründer: Geschichte der deutschen Kolonien, S. 122.
203 このテーマの研究書は現在多数あるが，例としては：Robert Gellantely/Ben Kiernan: The specter of genocide: mass murder in historical perspective. Cambridge University Press 2003; A. Dirk Moses (Hg.): Genocide and settler society: frontier violence and stolen indigenous children in Australian history. Berghahn Books 2004; Ben Kiernan: Blood and Soil: a world history of genocide and extermination from Sparta to Darfur. Yale University Press 2007; Florian Beer: Der Genozid an den Herero 1904-1908: Der erste Deutsche Vernichtungskrieg. München 2007; A. Dirk Moses (Hg.): Empire, Colony, Genocide: Conquest, Occupation, and Subaltern Residence in World History. Berghahn Books 2008. Dan Stone: The Historiography of Genocide. Palgrave Macmillan 2008.

204 注 13 参照.
205 Bley: Kolonialherrschaft und Sozialstruktur in Deutsch-Südwestafrika 1894-1914, S. 261, 314.
206 Peter Schmitt-Egner: Kolonialismus und Faschismus: eine Studie zur historischen und begrifflichen Genesis faschistischer Bewußtseinsformen am deutschen Beispiel. Gießen 1975, S. 6, 108.
207 Jürgen Zimmerer: Die Geburt des Ostlandes aus dem Geiste des Kolonialismus. In: Sozial. Geschichte. Nr. 19. 2004; Ders.: Holocaust und Kolonialismus. In: Zeitschrift für Geschichtswissenschaft. Nr. 51. 2003; Ders.: Das Deutsche Reich und der Genozid: Überlegungen zum historischen Ort des Völkermordes an den Herero und Nama. In: Larissa Förster/Dag Henrichsen/Michael Bollig (Hg.): Namibia-Deutschland: Eine geteilte Geschichte. Wiederstand, Gewalt, Erinnerung (Begleitband zur gleichnamigen Ausstellung in Köln und Berlin 2004.)
208 Birthe Kundrus: Von Windhoek nach Nürnberg?: Koloniale »Mischeheverbote« und die nationalsozialistische Rassengesetzgebung. In: Dies. (Hg.): Phantasiereiche: Zur Kulturgeschichte des deutschen Kolonialismus. Frankfurt. a.M. 2003, S. 110-131.
209 Birthe Kundrus: From the Herero to the Holocaust? Some remarks on the current debate. In: africa spectrum. Vol. 40. 2005, S. 300f.
210 永原陽子「ドイツと西南アフリカ／ナミビア」，24 頁；同「植民地責任」試論，13 頁.
211 永原陽子「ナミビアの植民地戦争と「植民地責任」── ヘレロによる補償要求をめぐって」，240 頁.
212 Ridley: Die Geschichte gegen den Strich lesend, S. 371f; Wilke: “Hätte er bleiben wollen, er hätte anders denken und fühlen lernen müssen”, S. 352; Norris: Literatur und Ethnologie des 20. Jahrhunderts, S. 280.
213 Riodran: »Eine Deklaration gegen Gewalt und Tod«, S. 33.
214 スピヴァク『サバルタンは語ることができるか』，65 頁.
215 Riordan: »Eine Deklaration gegen Gewalt und Tod«, S. 33.
216 スピヴァク『サバルタンは語ることができるか』，69 頁.
217 Ibid.，69，70 頁.
218 Ibid.，70 頁.
219 Riordan: »Eine Deklaration gegen Gewalt und Tod«, S. 34.
220 Schaller: From Conquest to Genocide: Colonial Rule in German Southwest Africa and German East Africa. In: A. Dirk Moses (Hg.): Empire, Colony, Genocide, S. 317.
221 例えば南北アメリカ，カリブ地方，オーストラリアにおける原住民殺害や，19 世紀末に日本軍が台湾植民地化戦争に際して行った台湾先住民殺害，太平洋戦争期の日本軍におけるマレー半島・シンガポールでの華人殺害などを想起するべきであろう。
222 Eckert: Namibia - ein deutscher Sonderweg in Afrika?, S. 226-236.
223 Baumbach: Verdrängte Kolonialgeschichte: Zu Uwe Timms Roman *Morenga*, S. 226.

Ein postkolonialer Prä-Holocaust-Roman über Deutsch-Südwestafrika

Uwe Timms *Morenga*

Miyuki SOEJIMA

Unter vielen drastischen Veränderungen in den Kulturszenen Deutschlands seit den 90er Jahren ist das sprunghaft angestiegene Interesse an Afrika zu nennen. Sowohl in der deutschsprachigen Gegenwartsliteratur erschienen seit der Jahrtausendwende viele neue historische Afrika-Romane und somit ist von dem 'Afrika-Boom' die Rede, als auch in der Geschichtsforschung ist die bisher fast vergessene deutsche Kolonialge schichte von zahlreichen Abhandlungen und Fachbüchern neu thematisiert. Darin ist zu erkennen, dass ein neuer Afrika-Diskurs entstand, der die deutsche koloniale Vergangenheit kritisch reflektiert und somit unter dem Zeichen des Postkolonialismusdiskurses steht.

Das Land, das im Zentrum dieses neuen Afrika-Interesses steht, ist Namibia. Dieses ehemalige Deutsch-Südwestafrika hatte als einzige Siedlungskolonie Deutschlands einen besonderen Stellenwert in der deutschen Kolonialpolitik und gewann erst 1990 von Südafrika die Unabhängigkeit. Im Hintergrund dieses Interesses stehen die Umstände, dass sich seit der Unabhängigkeit Namibias der Anspruch der Kriegsreparation an die deutsche Regierung wegen des Kolonialkriegs, genannt „Herero-Nama-Aufstand (1904–1907)", stellte und dieser Völkermord als erster Genozid des 20. Jahrhunderts besonders nach der Gründung des Internationalen Strafgerichtshofs im Jahr 2002 das Objekt der neuen Genozid-Forschung geworden ist.

Der erste und der wichtigste literarische Beitrag zu der Auseinan-

dersetzung mit diesem Kolonialkrieg war Uwe Timms *Morenga* (1978). Dieser Roman war zur Zeit seiner Erscheinung zu vorgewagt, so dass er bis zur Jahrtausendwende nicht so viel Resonanz fand. Seine literarische Innovation liegt nämlich in den folgenden Charakteristiken. Zum einen verwendet Timm keine einheitliche Erzählperspektive, sondern die Polyphonie der Stimmen, d.h. er setzt viele verschiedenartige Texte zusammen, z. B. Erlasse des Kolonialamtes, Militärkorrespondenz, Generalstabsberichte, Forschungsberichte der Wissenschaftler und fiktive Geschichten. Bei so einer Collage-Arbeit geschieht eine Dekonstruktion der Geschichtsschreibung, denn die Quellen sprechen nicht nur für sich, sondern auch gegen sich, und es wird demonstriert, dass Geschichte letztlich auch Fiktion ist, die mit den Interessen derer, die sie erzählen, unlöslich verbunden ist. Das war das offenbar ‚Postmoderne' an seiner Erzähltechnik, was ganz anders ist als bei den herkömmlichen Geschichtsromanen.

Zweitens steht *Morenga* unter dem Einfluss vom ‚Magischen Realismus' der lateinamerikanischen Literatur, deren Publikation in Deutschland erst Ende der siebziger Jahre begann. Die Eingeborenen in Südwestafrika sprechen fast nur in indirekter Rede, stattdessen spricht ein Ochse eines Ochsenwagens, der einer Missionsgesellschaft gehört. Er erzählt, was er und seine Vorfahren vor und nach der Kolonisation des Landes beobachtet haben, viele groteske und lustige Geschichten und Episoden von den Kolonisatoren und den Kolonisierten. Solcher ‚Magischer Realismus' war in der deutschen Literatur der siebziger Jahre verpönt: Deutsche durften nicht so über sich schreiben wie Gabriel García Márquez. Doch dieses Verfahren verschafft den Lesern Visionen, oder besser Re-Visionen der kolonisierten Gesellschaft, ohne dass die Stimmen der Eingeborenen, die G. C. Spivak „the Subaltern" nannte, durch die Pseudo-Authentizität in den Kolonisator-Diskurs eingebettet werden. Von daher

stellt Timms *Morenga* ‚avant la lettre' den frühen Ansatz zu einem postkolonialen deutschen Roman dar.

Zum letzten handelt es sich um das wichtigste Thema des Romans. Das ist eine Fragestellung, die den Protagonisten des Romans, Oberveterinär Gottschalk, durch die ganze Zeit des Krieges plagt: Wie überhaupt die brutale, kaltblütige und fabrikmäßige Vernichtung eines anderen Volkes durch das autoritäre ordnungsfixierte Denken der Deutschen herauskam. Diese Fragestellung und auch Äußerungen des Autors implizieren die Sehweise, dass der Völkermord in Südwestafrika die Vorform vom Holocaust war. Wenn man bedenkt, dass die Relativierung des Holocausts noch in den achtziger Jahren fast tabuisiert war, lässt sich verstehen, wie weit dieser Roman vorgewagt war.

Bei dem neuen deutschen Afrika-Diskurs, wo das Postmoderne und der Postkolonialismus schon digestiert worden sind, ist auch dieser Genozid-Holocaust-Vergleich - zwar noch etwas umstritten - aber meistens von der Literaturkritik und der Genozid-Forschung als überzeugend aufgenommen. Also, Timms *Morenga* ist erst fast dreißig Jahre nach der Erscheinung als der erste postkoloniale und Prä-Holocaust-Roman voll zur Geltung gekommen.

Erwägt man doch Timms Aussage, die Aufgabe seiner Literatur sei gegen Tod und Verletzung zu schreiben, so sollte man diesen Roman nicht nur im Rahmen vom „deutschen Sonderweg" lesen, sondern seine literarische Herausforderung sollte darüber hinaus in Verknüpfung mit der breiten Erforschung des Kolonialismus, der überhaupt genozidal war, angenommen werden, gerade jetzt, wo die Durban- und Durban Review Konferenz der UNO der Selbstreflexion und der Schuldanerkennung des Kolonialismus die Bahn gebrochen haben.